166
447

梅原香谷著

五三桐手染石川

大序より大切まで

特22
598

五三桐手染石川

熱田社前の塲

一木下妻お賤の方
一息子久蔵
一八百屋喜兵衛
一竹中妻關路
一丁人
一竹中供廻り
一木下供廻り
一とりさき人
一侍四人
一駕二挺人
竹中連中

一玉淵利金太
一左枝大清
一乳人お高

造りもの平ぶたい奥深ゐ浅黄幕玉垣石燈ろう舞臺上手に大鳥居松の立木所々にあり同釣枝にて神樂はやしにて幕開く

ト下手よりのりもの一挺そへある事付そひの下部捨臺詞にては入る足を床の上るりゐ成り

上るり　「夏の日もあつ田の神の宮もふで心も道も一筋にそぐな操の節かたき竹中の妻闕路國のあんたい夫との武運いのりの留主とし者の大澤十郎が家來玉淵利金太家來引連れ出参り

利金太　コリヤ者共今宮前で見掛たわ竹中が女房(敵國の)此宮居へのり込は彼が娘とどれあふた犬清めと内證の事が合点行かぬ十郎さまより仰を受不義の証據せんぎのため立越た某し彼奴見掛たはさいさきよし隨分ぬかるな合点か

家來　かしこまつて厶升る

上　「参あわして玉淵主從往來にまぎれ行そぎる

ト庭神樂に成る利金太家來引つれ橋がゝりへは入る

上　「八ツよ日影の世もせまく勘當の身ゐなるゐみ笠人目を防ぐ左枝犬清日毎よ運ぶ神垣や

ト神樂ゐなり向ふより着流大小深ゐみ笠にて出て花道の中程にて向を見て

犬清　武運を守護そる熱田の神前某も御勘氣御赦免相成よふどりや参詣の仕ろか

ト本舞臺へ來る内

上　「歸る内の向ふより三十余りの女房が所躰もかろきつまはづれ肌に添乳のおさゐごは梅鉢の染小紋そをと見るより

ト犬清平舞臺へ來る内上手ゑお高着流し高からげにて子を抱き出て來て犬清と行あひ犬清是れを見て

犬清　そなたは乳人お高でゐいか坊をつれて何國へ参るゑ

ト　あみがさとる

お高　ム、若旦那犬清さま私よりはおまへさまは

犬清　去れば今御主人小田春永公隣國美濃とあらそひ玉ふ此時節わつぱれ高名せんもの

お高　と思ふに甲斐なき勘氣の身の上ム、其心は御推量して居まそる小田の御内に誰あろふ左枝縫之助どの、若とのともあろふお方が御かんどふの其赴りは私の御主人竹中さまの娘御千里さまわなさとなれ染此清松さまを御くわいたい私しが女夫とはお末の奉公御寮人さまのお頼み故親子の手まへは湯治と云立て私しが在所へお供して案じたよりは安ひ初産世間を忍ぶ此の和子さまのけふが丁度御たんぜう日お宮へ参る此道でわなたの御目にかゝつたは御親子さまの盡せぬ御縁アレ〳〵何が御氣に入たやらにこ〳〵笑ふてお出で遊ばそ

犬清　ドレ〳〵

ト犬清抱子をとる

犬清　ハア乳が澤山なゆへか肥たことわいのふ

上　「我身の憂も子のあひに紛さて余念なき所へ先手と拂ふて行若燕これも社參と見へたる一群一目にしるき笠印五三の桐も遠目にもそれとわ見

ト犬清おもい入向を見て

犬清　ム、おれこそは木下どのイヤ何にれ高しばらく木かげでナア

ト犬清御高えばらく木影へ忍ぶ是を鳴物になり向ふよりお賤の方のりものお

のり供まわりよろしく出來り此時下手より八百屋喜兵衛悴久藏の両人出で參

りのりもの、まへに手をつかへ

喜久両人へイ〳〵御願で御ム升る

侍　扣へ〳〵

喜　へイ〳〵此下さまのお通りと存じた故に親子の者の相そせふ

久　何卒御とり上下りませ

両人　お願ひでム升る〳〵

ト両人めい〳〵願書をさし出し賴む侍これを捨臺詞にて追立よふとする此時

駕の内より御賤の方出で

賤の方　家來まちやア

侍　ハア、、

ト扣へる

賤の方　願れ者とあるなれば路次あがら聞ましよふ

両人　へイ〳〵ありがとう存じまそる

ト願書をさし出しお賤の方受とり開き讀下し思入わつて

賤の方　御領分佐屋の町人八百屋喜兵衛とやら此願書の表あては其方れ悴久藏二十五歳の時に親子の縁を切たる處段々身上不如意に付勘當免しやらんといへど返て久藏不承知し故の願ゑやナア

喜　ハイ〳〵不所存者故廿五年前かんどうは致しましたが彼めは段〳〵仕合そる私は打續ての不仕合どうぞかんどうゆるそれてくれまそよふ仰付られて下さりませ

久　ア、是々親じどのだまらつしやれ〳〵虫も殺さぬ此久藏をいろ〳〵のこり付て如何に八百屋の息子ゑやとてきうり切られてしまつたからわ親芋でも小芋でもなしじやそつちの身上茄子じやとて今となつてかんどうゆるし親がほして養れようとわどつこいそうわ立合ぬハイ〳〵御上さまの御慈悲にて重ねてかんどうゆるそといわぬよふに仰付下さり升せ

賤の方　成る程〳〵一たん縁を切た上は親子でなければ久藏とやらよりかもふ筋はない等然し產れてから廿五歳まで養育せられし其うわり今日より其喜兵衛とやらを廿五年間養ひ返せば双方とも五分〳〵云分あるまひ違背よ及はば表向より糺そぞや

喜　そんなら今から改めて此久藏の親とあり

久　悴となつて昔の通り

喜　それも廿五年の間

久　ねんがあひたら赤の他人

賤　立ちやア〳〵

ト両人花道まで行き

喜　然しゑろう草臥た孝行初にこれ久藏私を負ていんでくれ

久　イヤ〳〵私しも改めて今日から悴に成つたからわおまい背負ていんでくれ

喜　何をいふぞいコリヤ私しわコレ親じや〳〵

久　と、さん背負ていんで下されいのふ

ト小役の身振りそる喜兵衛を背負ひ

喜　子は三界の

両人　首かせじやナア

ト鳴物に成りよろしく向ふへは入る

賤の方　のりものも立や〳〵ア

家來皆々ハア、、

ト立かける此時お高犬清出て來り犬清は書物をお高に渡そお高まへに出て

お高　ハイ〳〵お頼みで厶升る〳〵る

侍　下れ〳〵御參詣の妨ひろぐにつくい奴下り〳〵下りおろ〳〵

お高　ハイ〳〵御參詣と存じながらの此願ひ

侍　ヤア〳〵成らぬ〳〵

家來　下りませい

賤の方　家來まちや何事に依らぬ願とあれば聞ぬて成らぬ

お高　スリヤ御聞屆け下さり升るとナア

賤の方　願書を是へ、ソレ家來共

家來　ハア、、

ト お高より願書を請とり賤の方に渡そ

上　「扉を開かせてお賤の方しづ〳〵と立出て

ト上手よりの床木の腰かけ願書を讀下し

賤の方　夫と此下藤吉どのは素性賤しき身なれ共春永公の御意にかない新參ながらも軍

議にあづかりぬとまなければけふ代參の自らはとりもなをさそ此下藤吉かくの

如くしつその麁服は上にたつわれ〳〵奢ざるよふをしへの教訓何事にもせよ願

の筋聞糺して非理を分けん、て、ろおきのふ申てよかろふ

高　ハイ〳〵お叱りもかゑりみぬ途中の御私訴御聞屆け下さをありがとふ存じ升る

ト此内願書を讀しまい

賤の方　扨はその子が聞及んだ左枝犬清どの、たね御主君春永さまかんきの御詫願とあ

る名代じやなうお願ないとても兼て入魂の朋友中始手の有ふようがなけれども
齋藤方ゑ縁を組む不届者と御聞届けあらざれば一ッの功さゑ立つまらば身命に
かへ御不興のお詫を仕拔く夫のこゝろ証據是れに

上　「のり物より取出そ文箱帛紗物

ト蒔繪の文箱と帛紗包の笠印を出し

賤の方　是こそ御かんさの節おづゝ置れし犬清どの、笠印又此文箱は夫と久吉深き心を
こめられし贈物御渡し申が違ぬしるし此上ながら早まつた心をださぎかんにん
の二字を守るが御身の爲とサアねんごろに傳へられよ

上　「余所ながら情のいけん犬清がかたじけ涙玉垣もぬる、乳房のお高のよろこび

お高　是も此子の面目で厶升る

賤　此上は參詣なさんそれ者どの

家來　ハア、、

賤　お高どのとやら是ゐて別れ升るわいのふどりや參詣致し升しよ

ト鳴物歌に成る家來皆々付そひ上手へは入る犬清此時出て來り

上　「跡見送りて犬清が二タ品とつてをし戴き

犬清　今に始ぬ此下どの、情ハア、、忝し〳〵

上　「情に感ぎるその處へ玉淵利金太出來り

ト利金太出て

利金太　ソレ

家來　ハア、、

ト「ばら〳〵と取卷く

利　ヤア〳〵犬清ヤイ犬が有家を四ッ目にして爰に犬のこかぎ出ぎたぶちかめされ
ぬその内に一つ廻つてわん〳〵となくか唐犬御めんとほんことて尾をふりうな
だれおかんでもモウ獵犬には六ッかしい首輪を付て引て行かワントかキヤンと
かしろくろか犬清返事はワント〳〵

上　「ワント〳〵と呼わつたり

ト犬清フットふぎ出し

犬　ヤアひるがんどうの子盗人齋藤ふちのがぶり桶の輪はぢいてくれん

上　「よらば切らんと身構へたり

利　ソレ者共

家來　ソレ

ト犬清利金太はげしく立廻りあつてトゝ皆逃込む

上　「跡お高は氣もせかれかたへのののりもの是幸と清松抱き身をしのぶ

トお高下手にある男のり物の中へは入る

上　「井木通りをしとやかにかへる關路が向ふより又向ふ家來をおつちらし息をきつ
てかけ來る犬清

犬　ト犬清大せいとあひ手に立廻りながら出て來り皆々を追散らし關路おもひ入御らんの如くせまりし急難女房乍も武家と見かけての御頼み何卒かくまひの下されたし

關　急難とならば見捨ぬが武家のならひにてあなゐのお名まへはへ

犬　拙者は尾州の左枝犬清

關　ア、是氣づかいあるな關路が慥にかくまふた

犬　ありがとう存じ升る

關　ト駕の中へは入る

家來　家來供しや

家來　ハア、、

賤　トのりもの立かける此時上手よりお賤の方出て

賤　ア、申つひぞお目もおじいたさねども自は小田家の忠臣此下藤吉が妻の賤と申もの近來せつない御頼ながらあなたさまの御のりもの申受とふム升る

關　ム、スリヤ様子を御ろふじたェ

賤　イヤ見たでもなし見ぬでもなし

關　所望とあをばあげまゐ物でもなゞれ共あなたの方の御のりもの私しも御むしん申度ひ

賤　左よふなれば此内を

賤　サア見たでもなし見ぬでもなしありのままにゐゐぬが花

賤　ム、シテおのゞみ被成るあなたのお名まへは

關　ハイ齋藤方の軍師竹中官兵衛の妻關路

賤　ム、スリヤあなゐが

關　あのおまへが

賤　左よふあれば猶の事もらひかゝつた此のりもの

關　イヤ此のりものは私しの城廓此下どの、おかもじでもめつたに指はさし升ぬ

賤　スリヤそふあつても

關　ハイ女でゐそあれ軍師と呼れし竹中官兵衛が妻の關路

賤　ホ、、スリヤ此方も同じ事小祿なれ共此下藤吉の妻のお賤たとへ金城の閉みをく共智謀を以てもらいかけて見せ升ふ

關　みごとそも宏が

賤　如何にも左よふ

關　渡そか

賤　渡さぬか

兩人　まづ其までは

關　お賤どの

賤　關路さま

關　御縁もあれば
賤　また重て
両人　それのりものやりや
家來　ハヽヽヽ

ト關路賤の方両人おもひ入立ならび氣味合あつて

上　「双方が負けぎおとらぎ立并ぶ美濃と尾張の軍師の聟笑ひつくれど心には角目立
別れ

ト双方別〳〵のこゝろにて両人の方の家來のり物かきあげ双方へ引分れ

上　「道を早めて

ト三重にて引ばりよろしく幕

竹中官兵衛砦手の場

一此下藤吉　一左枝犬清
一齋藤龍興　一樽井藤太
一四の宮源吾　一大垣三郎
一小田春永公　一婢おそわ
一同おそま　一同おとき
一娘千里　一母關路
一竹中官兵衛
一春永公の鎧武者軍兵
一齋藤の四天王
一のりもの
一關路の供
一軍兵大勢

琴歌あて幕明く

ト こし元皆〳〵矢の根鉄砲の筒をさうぢして居る

おそわ　こちの殿様は此頃の合戰に大きな手柄なされたをど矢疵とやらで引籠りてムる

ゆゑ軍サもしばし休みぢやげあ

おそま　そきいのう物がたい旦那様御家來衆もたんとあれど千里様やこちら迄女のあそ

びさそ事が大のおきらひで里へ下つてため〳〵のつゝのさうぢせぬかはり是に

ぎりご、ろのよい持筒みがきたてゝその矢の根大かりまたといこのもえい名で

はないかいあァ

おそき　是いのうたしなみなさんせ御二人りさん御両人様が聞いてムるシタガあなたの

いひ替はしなされた犬清様今度の軍サが起つてゝら此家とは敵同士國さへへだ

つ美濃尾張お便りも乳ふつゝりさぞかし戀しう思召し升せうおいとしうぞんし

升る

上　「噂もとぎの内おらん折柄奥より娘の千里

ト千里出る

千里　アゝコレさがない聲が高い母様はおるそなれど御病架へ聞えてはむつかえい靜

かにいや犬清様といひかはしたは両方軍サの起らぬさき子中なしてもとゝさま

のおゆるしなければ文さへもひしかくし任せぬ内に此そうぞうわまつさへ敵方

の娘にちなむわやまりとて春永様の聞きとやら聞くたび〳〵に悲しい事共思ひ

やつてたもいのう

上　「打しはるれば

すわ　それ見やいのいひ出さいでも大事ない事御きけん直しにあの庭のふぢの花お詠

めなされてお心を○アレ〳〵お笑ひ顔が出ましたわいなァ

ト こし元皆〳〵わや〳〵いふ

上　「笑ひ催そ折からよ

向ふよりお奥様のおかへり

上　「知らせよ程なく乘りものつらせ砦をかりの屋敷風しづ〳〵歸る奥書院

ト のりもの先に若黨二人附そひ跡より關路出て來る

關路　皆のもの太儀であつたのり物はそこに置き次へいて休足しや

家來　ハァ、、

ト皆〳〵は入る

關路　のう千里待兼で有うのう父御の氣質を破らぬ様と姫共と兵具のそうじ嗣長の日

を退屈におもひやらう

千　イエ〳〵私がたいくつより母様はおつかれでムり升うさうしてまァ御ぜんの御

首尾とやかくと父上にもおまちかね

關　さうあろ〳〵母も氣はせいたれどひまどつた咄しはあとで語りし様子を腰元共

おしらせ申しや

こし元皆〳〵　是りました

トこし元は入る

關　扨もがなと思うたが是迄も此母は知るまいと思やらうが二ヵ年あまり以前から
そなたは左枝犬清殿といひかはしてゐやらうがの

千　エ、そんならあなたはその譯を

關　知つてゐる〳〵互ひあそき合うた中なれば國ならびの小田殿へ表向からいひい
れて養子聟に貰はうと思うて居る初両家のあらそひ此砦へ移つてより逢れぬ事
を苦にやんで顔も細れば幾瀬のあんじ兎角頼みは神の力と歸りがけよあつ田の
お宮へ參詣し何卒両家和睦あそばしそなたの願ひも叶ふやうとろれ〳〵お頼み
申上げた御利生で思はぎもふしぎあゝふ晝手に入つさわしが土產はあの乘りも
の明けていはぬが心のひとひぢりもそてゐ戀の道積る事共何やかや母は奥へ

上　「と夕暮れてかそかにひゝく入相とともに一ト間へ立て行早黄昏れて燈を火の眞
實親身母親の詞の謎もとけ兼ぬる日影の氷文さへもとたゑし思ひ犬清が乘り物
の戸を忍ばしく明けて出る顔見合せ顔

千　ヤア犬清樣か

犬清　千里殿か

上　「夢ではないかとまろび下り戀しい事の數〳〵は胸につもれど詞ゑはいひつくさ
れぬうき事の餘る涙ぞやるせなきせな撫でさそり

犬　道理〳〵親〳〵の目を忍びふといひかはせし二人りが中ゑ慮の御勘氣詮方なく
漂泊の中ふしぎにもそなたの母御關路殿に御目にかかり存じかけなう此砦へ伴
はれしもつきせぬ緣さりながら春永公へ詫も叶はぎ所詮二人りが身の終り軍サ
が緣の切れ目ぞや

上　「聞くに千里が氣も沉えて
國と國とはへたつれぞゐにしなりヤこそ深うなり

千　「たまの逢瀬も眞實に情けの胤をおなかゐやどし人目忍んでやう〳〵と
產み落したる清松が顔見る事もなき明かし夫さへあるにゐぢきない二人りが緣
の切れ目とはおまへばかり切るきでも思ひ切られぬ片そぎの

上　「契りにうそはないものをたのみがたないおの樣と恨みかこつぞ乙りなける理り
せめて犬清もおんと答も中仕切の襖へだて、打しはぶく聲におどろき犬清に呼
き〳〵椽の下忍ばぎ月の葉がくれや染めぬもみぢを顔にれく心の内こそせつな
けれ曲れる枝と直にため木は木と分くる竹中官兵衛重晴手疵に屈せぬ丈夫の顔
色刀を杖に立寄れば娘い差寄り

千　トト官兵衛病ひ鉢卷刀とつゑにしづ〳〵出て來る褥の上に坐ゑ千里見て恂りこ
わごわ乍さしより
暑氣の頃とは申乍風が當れば御養生のさゝわり御用あらば御病所へなぜお呼び
あそばしませぬ

ナニサ〳〵こぶし未熟の弱敵ばらがさぴ矢是しきれかすり疵いつかな屆せぬ某
おれ共達つて保養仕れとの主命據なく引籠り居る折を親ひ親もゆるさぬ忍逢ひ
ふ屆き至極のめろうめ樣の下にはひかゝむ色に寄り來る煩惱の犬清とは名に相
應サア爰へ出よわつぱめ

上　「といはれて二人りは氣も消に〳〵いひ合さねど一時に汗のふちなそ心地せり思
案極めて犬清は目遁りへつゝと出

ト千里ひつくりしていろ〳〵こなし犬清えんの下よりつゝと出て両腰を投げ
出し

犬　御存じの上は包むに及ばぜ敵〳〵とへだてし中御目をかそめし此身のふ義れ手
討は覺悟の前手向ひ致さぬ御存分になされて下さりませ

上　「両腰がらりと投出し

官　ト覺悟の思入官兵衛ぢろりと見て
ハテ健氣の一言助け置けば一方の攻め口持兼まじき若者春永お尋當請けぢは幸
ひ義龍公に奉公し官兵衛が聟とならば小田が家にて莫大の所領にまさる武名の
譽いやかあうかサア分別して返答せよ

上　「和らぐ詞に千里はいそ〳〵

千　ハ、、今まで案事たと、樣の御機嫌直り女夫あせうとは夢ではないかコレ申し
思案所か御受申して下さんせ

上　「やいの〳〵のしどもなき娘ごころぞ道理なる犬清は只默然と暫し詞もなかりし
が以前手に入る笠印懷中より取り出し

ト千里はいろ〳〵悅ぶこなし犬清はさしうつむき思案のこなし懷よりくれな
いの笠印取出し官兵衛の前におきながら

犬　平家支流の春永公へ仕ゆる故濃き紅ひの某が笠印に望ひらくば官兵衛殿の姓名
を書き記るし春永さかの武士とおしたき我念願御所存いかに

上　「ト云せも立ぜ

官　ム、當時尾濃両國に於て此竹中に左程の事いわんぜ者覺へない一と器量ある氏
意の樣尋ね問べき子細有ャイ娘用あれば手をならさん次へたて〳〵

ト千里ふえよ〳〵と

千　ハア、、

官　エ、立と申よ

千　ハア、、

ト よろしく奥へは入る

上　「ゑえやくなき父が云やう千里はせひなく立て行聲をひそめ
若年ながら音に聞ひたる左枝犬清色に引れ此砦へ入來らん樣有まじ所存包ま
ぜ物語らば咎ひるは武士の表娘の緣につながる其方一方おらねば心置かず我存
念も云聞さんイザ先是へ

上　「ト睦まじく初めにかわる重晴が詞に辟さる色目あく上る書院の緣者と緣者因み
も厚き式臺に作法正しく座に直る
犬　然ば御免
上　「犬清威儀を介つくろい
ト よろしく二重へ上る下手に座して
犬　御賢察の如く此砦へ入込みしは全く息女の色香よ迷ふ某ならぎ折り入て頼み入
たき一大事
上　「ト云はんとせしが傍りを見まわし
犬　戰國の人心うかつに口外なしがたき密談御推察なし被下
上　「猶豫氣色見てとる重晴
官　尤もさこそ有べき事他言せまじき勇者の潔白只今見せん
上　「ト差添の笄抜き取り庭先の松が枝つたふ藤うづらの花を目當にはつしと打手練
お落取る紫藤の英犬清屹と打守り
ト 庭先の上手に有 松が枝にまとゐたる藤の花目がけ小づかを 打藤の花ばッ
〳〵となる犬清是を急度見て
赤色は小田の旗色朱を奪ふ紫は武勇尖き齋藤氏姓と則あの藤原落花枝よ歸らざ
る官兵衛殿の花の金打底意も知れて安堵の上は様子包まず申上ん
上　「申上んと座をしめて

犬　扨も去天文十九年の頃よりも蝸牛と諍ふ小田齋藤遂に取り合ふ干戈の働き去年
の冬より當地の境洲股川に對陣し勝負は午角と見ゑたる所
上　「貴殿の下知にて美濃路の兵此三州より取かこみ
犬　鷲津丸根と始めとして味方の砦を打破らを
上　「殘るは丹下中島両所
犬　爰が主人の御陣所なれど矢種兵粮玉薬も至て乏しき小勢なれば敵は多勢にくら
べては
上　「嚴お卵を打ごとし
犬　一ッの頼みは官兵衛殿何卒主君春永公に御味方被下ば百万騎の勇兵にもおさ
〳〵おとらぬ貴殿の軍略御許容願ひ奉る
上　「トしさつて頭を下げゝれば
官　ムゝスリヤ春永は小勢にて丹下の砦に籠り居るとな
犬　サゝ其御主人へ犬清が勘當御免願ひの網結ぶか切かは足下の胸中
官　ムゝ智勇兼備の名將と聞きしに違ふ春永が度々の敗軍必定奇計や有んかと心迷
ふて主人の出馬を止めしが味方の英氣に聞おぢして過半落失せたる両所乃砦は
明城同然今こそ疑念散じたり防戰の用意いたせ
内ニテ軍兵ハアゝ
上　「呼はる聲思ひ寄ねば母むれ兒供にかけいで

ト官兵衛の聲に驚き關路千里走り出て

關　ヤア何事出勤御免の御病氣中防ぎの用意とおつしやるは

官　ヲ、敵の空虛を義龍公の本陣へ告げ知らせん支度だわい

犬　ヤア〳〵〳〵スリヤ最前の花の金打は詐で有たよな

官　ム、両家雌雄を爭ふ時節表裏の金打誠と思ふか娘が緣にたより我を味方に付けんなど、はちよこざいな小わつぱめ

上　「見そかそ如ゝ官兵衛が逆立無念のはかみ

犬　主君の勘當赦されんと矢竹にはやつて味方の大事我舌頭に引出せし小田の滅亡

上　今此時是非もなや口惜や犬清が一世の不覺恨みの切先受取れと

「そわと拔てかけ向ふ中を隔つる女房關路

ト犬清立腹のこなし刀をぬき官兵衛に切付る關路千里驚き両方へたかる官兵衛は犬清がかいなをした、かよ取犬清をつきはなそ

關　マア〳〵待て下さりませ

官　ヤア手疵は合へとわを達が手に及ぶべき某ならぞ命は助る早歸れ

上　「ト刀たぐつてはるかに投げのけ味方へしめそ合圖ののろししらせはかくと件の白刃目當に庭先烽火臺丁度なぐれば筒口へ石火火うつると見へたるが狼煙空に立登り殘る砦も一時ゐ合そ煙は兼ての要害手等を見るより

ト此間に官兵衛下手の狼煙サアサア白刃を丁と打つ花火の狼煙はしり立つ員鐘太鼓の音に成る犬清刀をぬき思入我腹へ突こむ事

千　南無三寶もう是迄と

上　ト千里うろ〳〵しがり付

關　あんまり氣強いと、樣のお心一つで此御最期迄樣仕樣は無かいなァ

上　「そがり歎けば母親も道理ぢや〳〵日頃戀しい床しいと案じ暮したそあたがいとしさ夫ゐ引かへ官兵衛殿可愛娘に連添ば聟は子じやないかいの

「武士の意氣地か立たぬとて見殺しにそる無得心是を知は武士の常に引かへ胴欲ぢや〳〵わいなァ恨み歎くを耳にもかけぞ忠儀にこつたる氣丈の老人腹をねる軍慮の工夫

官　ム、〻五星をかんがへみれば味方ゝ北方坎爲水時に三更子の上時水に水を重ぬをば南方の火の尾州を打に利ある刻限君の御出馬此圖をはづさぞイザ本陣へ乘がへ引ケ

皆々内ニテ　ハア、、

上　「下知そる内に一間より

義　龍　ヤア〳〵官兵衛病中の苦勞に及ばぞ齋藤次部の太夫義龍とくより是にて聞いたるぞ

上　「ト襖をさつとおしひらき黑革威の鎧なげかけ繁金物のとつぱい兜花にゐれたる

走馬の勢ひ前後を守護そる諸軍勢傍りを拂つて見へたる有様存じがけなき御成
やと低頭平身なしけをば

官　ハアヽ、こわ存じがけなき御成ハアヽ、

　ト平伏そる義龍四天王つれて行かゝる

義　尖き味方の鉾先にて過半せ先取る敵の要害殘りし砦は丹下中島只一戰に攻崩さ
　んと進むる手勢は其方一人遮て止めしは犬清めが内緣ゑ引れ二心や有かと密に
　立越し伺ふ處敵の空虛を計り知つたる臨機應變今に始めぬ竹中官兵衛疑ひ晴る
　ヽ上からい短兵急に押よせん頭を得る今宵の一戰ハヽ心よや悦ばしや

上　「我まんに慕る强氣れ詞官兵衛猶も恐れ入り

官　何條娘が愛におぼれ義心をいかで忘るべき戰場の働らきこそ叶いをとも御供御
　赦免被下べし

義　イヤサア〳〵手疵も未だ治せざる内心勞は保養の妨げ砦に殘つて勝利の知らせ
　相待居に時刻移さぞ出陣せん

丸岡　是と申も竹中公の御軍略のなを處やがて四海は思ひのまゝ

角川　義兵の旗揚なゝたく内イザ我君御出陣

上人　遊され升ふ

義　それつゞけ

上　「ト勇み立門出を告る鯨波の手勢隨へ出たまふ跡見送つて官兵衛重晴

官　主人の疑ひ散せ玄上は今こそ赦そ犬清と未來を契る水盃女房よきに計らへと

上　「ト思ひがけなき一言に

關　エヽそりや眞實でムんそかへ

官　ムヽ不便の生害見そつるも武士の誠忠義心は義心恩愛は恩愛それ早く〳〵

上　「ト情ある夫の心汲取りし柄杓の長柄短夜や月の滿干も幾千里手に取上て親〳〵
　の情々いたゞく水盃

千里　申我夫今と云ふ今お赦請た二世のかため未來は女夫でムんそぞへ

關　チヽ悲しひ目出度取結び酌は此母手負にはいみ物あれど娘の心のゐごりないひ
　しやくの盃手とかけて下されば義理は濟むアサ〳〵早ふ犬清殿

犬　ヤア祝言とは嬉らわしい目前主人の仇かたき竹中の妻の千里尽未來まで夫婦の
　緣切たる印は此通り

上　「ト杓をつかんで投付る

千　そんなら私しの未來の緣は

犬　ムヽ詞かわそも是かぎり

上　「トはげしき手負が詞のやいば取るより早く我と我がのんどにかつぱとつき立る
　母は見るよりかけよつて

　ト千里自害そる關路驚き介抱して

關　此うき事を見舞ため盡したるも仇事に成はてつるか悲しやと

上　「なみだながらの介抱に手負は苦しき息をつき
千　思へばはかない私しの身のうへ此世のゑんは薄く共責て未來ははちもばの玉の
　うてなで夫婦ゐと樂のしんだ甲斐もおふお主大事と、とさまの忠儀のはがねに
　情けなや
上　「二世の縁さへ立切れし心の内の悲しさを
千　推量して下さんせ
上　「迷ふわいのと斗りにて泪に血汐のまさるらん折から風が吹き起る貝鐘れ音寄大
　鼓さも物すごく聞へけり官兵衛は耳そばだて
　ト陣がねよせ太鼓の音そる
上　「やゝしばし打あんと
官　早合戰とおぼしくてはるかに聞ゆる軍馬の物音ハテ勇ましゝ勇ましゝ
上　「勝負はいかにと心せき見やる外方へ物見の軍卒大垣三郎息と切つて出で來る
大垣　御注進〳〵
官　注進は心元なし凶事か吉事かなんと〳〵
大垣　さん候扨も味方の三万よき
上　「二手にわかつて中島の柴田佐久馬がかためし砦の中へひた〳〵〳〵と押よせ
　〳〵ときを作つてせめかくれば見せかけ斗りの籏さしものふせいの小田がたう
　ろたへさわぐ兒と呼ばれし

大垣　柴田をはじめ井けだ遠山森佐久馬
上　「柵をくゞつて八方へ逃しは立てじと追つめ〳〵
大垣　春永がえんがりせし丹下の砦もひとひしき
上　「ひしや〳〵〳〵とおぎたて〳〵立たは立がさ長柄のやりで柵のまんだら大にい
　つまみちよいつまみョイヤサョイ〳〵サア
大垣　味方は破竹の勢ひにて未だ合せん最中成れど味方の勝利うたがいなし又おい
　〳〵と御注心早やをさらば
上　「申捨てゞ
　ト花道まで行氣をかへて
上　「引かへす
　ト一散に向へはいる
官　味方の手つがいよくしたりハテ心地よきしらせよな
　トよろこぶ事
闇　是申官兵衛殿一旦味方の勝利と有ばおまへの忠儀も立は道此上のお願に理を非
　にまげて小田方へお味方あれば大清どのと娘の未來も緣もさらぎせめては清い
　りんじもをそゝむるが親の慈悲
官　ヤアかしましい二心をいだく所存あらばきやつを眼前見殺そべきか主君より玉
　はる玉ものにて身体八臂を養へば親子の命は主君の物無益おくりごと聞耳おい

だまり居ふ
関　スリヤどふあつても
官　くどいわい
関　ハア、、
上　「ハッと斗りに妻關路懐劔取るより咽へかつぱと突立れば千里驚きそりよつて
千　ヤア母さまには何ゆゑの御生かい
関　何故とは情ない父上の意地つよき御心よりかわいつぼみの花を二つさでちらそ
　　が親の慈悲かいのふ子よりもかわい孫までも有りとはしをど顔さへも
上　「知らぎに暮しはからそも月日もかへぎ一時か孤となそもきどふは親子夫婦より
　　修羅の道
関　かしやくの程と成たるか
上　「夫に恨みのかぎ〳〵をかぞへ立たる八ッ橋の涙ちまたの三河地や澤邊の水もま
　　つやらん程も荒らそな踏立〳〵息をきつてゥけくる注進官兵衛見るより聲をか
　　け
官　如何に藤太いよ〳〵味方の勝利あるや如何〳〵〳〵
上　「如何に〳〵と呼はつたり
　　ト以前の上るりにて藤太花道より出て來り
藤太　さん候初度の戰勝あのりたる味方の勢まつしぐらにと追かくれば逃たと見へし
　　は敵の手だて
上　「場所よき處に引かへして初よかわつて柴田の强勢必死と定めしきつ先ゐ味方も
　　しぞろに喰留られ
藤太　桶はさまにたむろある義龍公の御陣の勢ひ
上　「追々よかけ付〳〵先手に加はる透を覗ひ山道けわしき谷間より君の御陣の後を
　　見かけて思ひよらざる小田春永諸軍を隨へわらわれ出で
藤太　ソレ義龍を打取レヤア〳〵
上　「ト下知につれ群りかゝるを近侍のつわものふせぎ戦ふ其處へ敵勢より母衣武者
　　一人まつ先に大音あげ
藤太　春永公の御内に去る物有と呼はれたる左枝犬清是ゐあり義龍の御しるえいで玉
　　はらん
上　「といふより早く鎗を捻つて飛蝶の如く突きふせなぎふせまさゝく内頼み切つさ
　　る味方の人々只一人ゐ切立られ手負打じに死人の山
藤太　人間業とは見へ申さぎ
　　ト大息つき此間よろしく鎗を持たる忍びの軍兵を相手よ注進のこなしゐる官
　　兵衛殘念なるこなし有て
官　ハゝア扱こそ小田の謀計に落入玉ふか氣づかわし其のみならぎ春永の馬前に働
　　らく犬清とは不審しして主君には別條なきか

藤太　されば〳〵かく亂軍となる上は主人れ生死覺束なし御先途見屆け奉つらん

上　「申捨てぞ欠り行物に動せぬ竹中の始めて吐息突きあへぎ

官　スリヤ若者の切腹も苦肉の手だてゝ有たよあ

犬　ム、推量の通り味方空虛と僞りしはまつこの如く義龍をおびき出して討んぜ是皆軍師久吉の謀と今と云今犬清がお役に立たる此切腹アラ嬉しやよろこばしやなア

上　「問く度〳〵に驚く官兵衛

官　チエ、、口惜しやなア重晴程れ引取が風聲のやからに討れしか心元なし主君の存亡かけ附救ひ奉らん女房もの、ぐ〳〵

ト官兵衛氣をあせる事よろしく女房泣て居る故に官兵衛氣をいらち

上　「足踏こたへよろい櫃手を掛ながらよろ〳〵〳〵氣ははやれ共手疵のなやみよろぼい〳〵立てはこけ居ていまろび心あがけばせきのぼし手疵やぶれてほとばしる血汐のくれないまなこの光りまた打立る引がねゑ連てかけくる四の宮源吾あけに成て立かへり

ト陣かねにて向ふより四の宮源吾手疵を負たる形にて軍兵貳人と立廻りながら出て花道よき處にて軍兵と一寸立廻りあつて軍兵を追込みきつと成る

源吾　官兵衛殿〳〵

ト いひながら舞臺へ來る

官　チ、汝は四の宮源吾か戰場の運命心元なし我君の御先途は如何〳〵

源　ハ、、是非もなき御運の末謀に落入て諸卒も殘らぜ討死して御大將義龍公手ひどく働らき玉へども敵勢失どき狹間の闘逃れん方なく犬清が刄の下に御落命

上　「大崩れして士卒も散ぢゝ陣所〳〵も敵に奪はれ殘る皆此壹ケ所

源　御油斷あるな官兵衛殿

上　「いふ息さへも切れ〳〵に其まゝそこへ倒れ伏す

ト源吾よろしくこゑしあつてドゥ倒れる

官　ハ、ア天成かゑ命なるかな他年の謀策一時に破れ主家の滅亡今日只今かゝる大事を引出せし根ざしはうぬらにつくゝ兩人

ト兩人を引よせ引倒し

官　五十年來不覺を取ぬ官兵衛に陡くも恥辱を取せたゑア主君のおんてき國賊め

上　「怒りの眉毛もさか立て拳しゑつとふ血の涙時しも爰に寄手の太鼓

ト官兵衛てなし有るよき程に文句の通り陣がね太鼓鳴る

上　「音に響きし御大將小田上總の功春永

ト是にて鳴物ゑ成り小田春永陣立裝束にて軍兵引連れ向より出てよろしく本舞臺へ居出る官兵衛見て

官　ヤア汝は小田春永主君の仇き此處へ參りし是天のあたへイザ疎密に勝負致せ

上　「勝負〳〵と無念れ息ざし飛かゝらんず其有樣春永公御らんじて

春永　ヤレ早まるな竹中氏齋藤道三を毒殺して勿体なくも足利の四海を奪はん義龍のいんぼう其身の敵は其身の罪あゝ誰をうらみ敵とせん元より齋藤旗下れ貴殿不代恩顧と云ふも有ぢ我儘の師範となり政事を助國民をあはれむこそ誠の義者有無の返答せられよかし

官　ヤア無益の問答樣なき台客千變万化お理はとけど眼前主君の仇敵会へ來るは火に入る虫素頭取て主君に手向けん

上　「怒りながらに立上る

ト官兵衛立上る折しも向ふにて

此下　ヤア〳〵官兵衛義龍が首打取たる當のてき左枝犬清見參せん

上　「鎗提ささけて欠る來母衣武者之なん小田の軍師にて鬼と呼ばれし此下藤吉御前に向ひ

此下　此の藤吉が下知に隨ひ敵地に入つて命を落し謀事と行ひしは天晴の犬清又戰場にて義龍を討取り武功を顯ぢ犬清は則之お

ト藤吉軍兵引連れて來り春永に向ひよろしくこなし有て母衣を取り抱子の清松を出して見せる

千里　ヤア清松か

上　「いふも苦しき手負の有樣久吉かさねて

ト千里のびわがり苦しきこなし久吉思入有て

藤吉　此幼子の清松よ御勘當おゆるし下さらば拙者よ加增の君恩にもはるゝにまさる御仁惠

上　「思入てぞ願ひける大將莞ぢと打ゑみ玉ひ

ト春永こなし有て

春　一ヲ名ィ二人の希代の犬清死しての忠臣生きての君顯能勤めたり出かしたり欠引き勵げしき戰場にて心よげなる寢顏の樣適れ大勇賴み有り今ぞ勘當ゆるぢぞかし又未來へ赴むく犬清に恩賞せんソレ久吉

上　「ぢ下知のした

久　ハア、、ソレ者共

家來　ハア、、

ト首桶をまへに出ぢ官兵衛取て見て

官　是こそ主君義龍公の御しるしェ、淺間しき御有樣犬清に恩賞とは我に送つて情をかけ勇氣をくじかん結構よおアいよ〳〵恨の重成る春永慢悟廣げ

上　「ぢ詰よれば

ト官兵衛立かゝる

久　ヤアそこつ〳〵當のかたきは此久吉が負たる犬清サア打竹中サア〳〵〳〵

官　ヲ、いふにや及ぶ

久　サア切れ

上　「トつき付られかざす刄の下もへつまごふ斗りのしよぼ〳〵髪をやく〳〵寢るおさ
な子に猩や娘のおもざしにこ〳〵がほのあい盛り思はぎ見とれて
官　アヽよい子じやなア。孫をじゝとがうひけんざん産着の重も取れもせぎ邪見に
なりし刄の下嘲おそろしき夢や見つらん
上　「不便の孫の寢そがたや
官　げんざい娘の最期にさへ涙一滴こぼさぬ官兵衛義に張つめし强弓も血の緒のつ
るに折たるか
　ト刄刀振あげ幾度もして切にかゝる
官　アヽ孫にやかなわぬ
上　「大磐石の魂、しひも今ぞくじけてはら〳〵留かねたる恩愛の涙汲出ぎ如くな
り犬清につこと打笑ひ
　ト官兵衛張のぬけしこなしにてトゞ下に居る犬清嬉しきこなし有て
久　久吉殿の御厚恩にて御褥氣御免有上の思置事少しもなし今こそ女房見殿仇もう
らみも是まで〳〵お暇申ぎ
　ト刀を引まわしかける久吉よろしく留て
久　ヤレまて犬清おとなぎ此清松某が守育て老先き目出度榮を見せん
　ト久吉よろしくこなし有と赤子笛にあり抱子泣く久吉ゆぎぶりながら
久　いんのこ〳〵いんのこやいんのお〳〵いんのおは

上　「犬清が殘ぎ忠儀を末の世に左枝政左衛門時家と名に知られたる武士は此おさな
子の事なりける官兵衛數行の涙を押へ
　トよろしくこなし
官　敵ながらも情有る小田に刄向ふ弓矢はなし我は是より栗原山の閑居にこもり主
君を始め猩娘の菩提をとむらんイザ去らば
犬　此犬清も近づく知死期我君おさらば
　ト刀を引まわしてよろしく千里共々お荷入る
春　義龍亡びし上からは不日に都へ上洛して官領三好長慶がそこひをさぐらん此下
藤吉
久　ハヽア仰にや及ぶべき時移ぎ奇計を成さん
　ト宜敷久吉と春永と入かわり
春　小田の猿色あかねさぎ
久　朝日まばゆき鎧の袖
官　奇羅一天に輝かさん
二人　さらば
上　「武名の程こそ類なき
　トよろしく三重の送りにてひよふし幕

南禪寺山門之場

石川五右衛門
堀尾茂助吉晴
捕吏　數人

本舞臺一面に櫻の花盛り東山の風景を描きたる道具まく鐘の聲ゐ風の音を冠せて幕開く

トこゝへ(一)(二)(三)(四)の捕吏何れも微行のさまにて出で來り

(一)　當時將軍の武威衰へ諸國に兵亂止む時なければ洛中洛外は言ふに及ばず近國近在の村々にも强盜徘徊なすよし

(二)　日々の注進櫛の齒を引くが如くなれば我々一同姿をかえ詮義に詮義と重ねれど今に於て行衛知れず

(三)　人の噂に依る時は此南禪寺の山門に身を隱し居るとの事

(四)　實否は確かならざれど怪しき氣色あきにあらねば心を付けて探索それぞもこれといふべき手掛りなく

(一)　日々心を惱せど其甲斐なさこそ口惜しけれ然るに只今目に付きしは世にも怪しき一人の修行者、山門のうら表うろ〳〵徘徊なせし樣子何とも以て合点行かねば

(二)　此れより直ぐゐ一詮義、樣子に由ては其塲を去らず引縛うではござらぬか

(三)　いかにも夫れは上分別、修行者を引とらへ强問なさば張本の在家を白狀なさうも知れず

(四)　少しも早く參りませうか

皆々　夫れが宜しうござらう〳〵

上　トこれを同じく鐘の聲にて四人とも上手へ這入り跳への唄上瑠理にある

「夫れ東山の春景色柳は翠咲く花の色は深紅の染模樣錦ゐ映る香りこそ祇園淨土の烟なれ青山影裏塔重々として彌高き雲井の軒と起伏の床に連なる櫻のかげ肱をまくらの轉寐も夢香ばしき姿なり

ト此の切れにて道具幕を切ておとす

本舞臺三間の間正面ゐ極彩色朱塗の柱高欄あり具中に朱ぬりの唐戸雨落まで瓦葺の家根朱ぬりの軒上下とも霞まくを張り總て京都南禪寺山門の景色よろしく日覆より櫻の釣枝二重におろし此處ゑ盜賊の張本石川五右衛門好みの着付け大百日にて金の烟管を右手に持ち悠々と烟をふかしながら四邊を詠め居る見得よろしく納る

五右衛門ハテ心地好き景色かな遠く望めば丹波丹後の山々翠を籠めて眠るが如く嵐山の花の色霞を引いて烟るに似たり近くは洛中洛外の甍にうつる夕日影遲傾きし足利の御所にも柳の芽を吹くは誰れに折れとの心よな昔平の將門は比叡山の頂より王城の地を見下して有らぬ謀叛を起せしと聞く今五右衛門は山門より足利の世の季を見て亂れし天下を踏みゐぢらんとぞ夫れと此れとは違へども氣色は同じ春の宵ハテ麗かな詠めぢやなア

上　「扇の濁りも暫くは、花わ清みてぞ見えよける折しもわれ雲間より烈しき羽音屢聞こて飛び來りたる一羽の鶴雲より白き羽と伸して光りかゝやく欄干の上にぞ足を休めける五右衛門キッと目をつけて

ト此淨瑠璃の内風の音圖かに響きて丹頂の鶴一羽跳への絹を口にし欄干の上にとまる

五右衛門心得がたき鶴の有さま人をも恐れぬ欄干に足を休めし不思議さよ、ハテナア

上　「しばし詠めて居たりしが

五右衛門ヤ、口にくはへし此絹切れ何さま仔細あることならん何んにもせよ

上　「立ち寄り絹を手に取り上げ

ト件ンの絹切れを取上げて

五右衛門なんぢや

正是偉人起業秋
假將三尺腰間劍一
功名何用問薰蕕一
掃蕩青山六十州

ム、碧れを千載に遺し得ぞば寧ろ臭を万世に流さんといふ詩のこゝろ扨は五右衛門ゑ悪事を重ね遂には日本六十余州を此手の中に握れよといふ天よりの御告なるかアラ心地よや歌ばしやなア

上　「肩ゆそぶりて高笑ひ血の盆と見ゆるまで大口開いたる有さまは鬼も恐るゝばかりあり後にうかゝふ捕吏の役人

ト きッと見得此以前より前の捕吏四人うかゝひ出て

四人　捕た

ト打ちよる

上　「双方一度に打ち込む早業五右衛門驚く色もなく物々しき者とも哉イデ目ゐ物見て呉んづと身を交はして虚空を打たせ又た突き入るを左右に開き十手の下をかい潜る輕きは鳥の飛ぶ如く強きは鬼も挫がん顔色一上一下と戰ふさま足踏み鳴らせば影うごく夕日に散るや櫻花雪と見まごふ其中に暫く挑み爭ひけり

ト此内に五右衛門両人の捕吏と好みの立ちまはりよろしく一人と刎ぢ上げ一人を見事に投げ返して

五右衛門ハテ小ざゝしき

ト欄干へ片足かゞてキッと見得此れを跳へのせりの鳴物になり山門を次第々々あせり上る

造り物山門の下を見せたる道具よろしく跳への鳴物にて道具とまる

ト門の内より堀尾茂助修行者の跳へにて出で來り逐りへこなしあつて

堀　尾　石川や濱の眞砂は尽るとも

五右衛門ナヽ何んと

堀　尾　世に白波の打たぬことなし

五右衛門　エヽ

ト手裏劍を打つが木のかしら茂助錫杖にてうけとめる

堀尾　修行者に御報謝でござるよな

ト五右衛門は上あてキッと見得茂助は上を見込む此のもようよろしく幕となる

造り物平舞臺向ふ赤壁納戸佛檀押入上手折廻り反古張の障子家体下手ぬり塀いつもの處より門口上手に墨ぬりの雛御殿一つべつひ釜掛其他よ雛の小道具いろ〳〵入用幕の内より娘小冬雛かざりして居る合方にて幕明る

上　「土百性の小娘に似氣なき物と村中の可愛がるので親は猶子に目の見へぬ斗りかとかひもの、内障病無なんぎも深からん明なば節句宿りから雛の道具でも見倒屋の太次兵衛から財布肩にうけとり二三人

ト在郷唄になり向ふより太次兵衛米屋五郎助木屋宇平皆〳〵掛取の形にて本舞臺へ來る捨せりふにて門口を覗き

太宇　内に居さそやるか近所まで參つた次手に一すたづねに

ト皆〳〵中へは入る小冬之を見て

小冬　あれと、さま掛取さんが來てじやぞへ

ト上手障子の内にて

治　ヲ、開さ〳〵

上　「と出る足元と

小冬　其あぶない怪我さんそなへ

治　ヲヽ合点ぢや○是は皆さんよふムんしさ
太　治左衛門殿こなた目が見へぬので嘸ふじゆふでムふ
治　イエ〳〵けつくはたから思ふようにないもので厶る若爰ゐも七八年も暮そによつてなんぼふ俄目くらでもそこゐは何が有る爰には是が有といふかつて覺へて居るによつてめつたにけつまづいてこけるじやムらぬコリヤ小冬よ大儀なから勝手へ行き茶を汲で來て皆の衆へ進せませい
小冬　アイ
　ト小冬三人に茶を汲で出る
太　コレハ味イ〳〵コレ治左衛門殿こなたは河内の石川村でとゝこふも暮しさ身代で有たげな此壬生村へムつてから打つちひ此不仕合去り迚氣の毒機縁といふ事も有ならひ又所でもかわつて見さつしやれのふ
治　ム、馴染とて太治兵衛殿忝じけなふムるしたが禍福がめい〳〵の片づく中々所にはよらぬもの両替町に居てさへ錢金ゐ不自由のない人もあり長者町にそみ貧乏そる人も有りなんぼうどの樣に思ふても運が來ねば役に立ぬとかく立身そる物もくわつけいそる物も皆運づく
宇　サア其運と云物い天ゐ有げゐ其が手近に有物なら買入て置たなら運が松があがるで有ふの
治　それでい貧乏人がきつと難義をそるで有ふわいゐア
五　こつちもふさがつて有雪隱じや
治　とは又どふじやいのふ
五　ハテ運をまつがよいわいのふ
治　ハヽア何を仰るやら
太　時にこふして出て來た物のあなた方はどふ成升る
宇　あなた方がまつてやる思しめし私し共もなる太治兵衛さん
五　ソリヤあなたがそうなら待升ふかへ
太　そんならそふし升ふ
皆〳〵　サア〳〵いに升ふ
治　マア待て下さりませ其よふに仰つて下さり升る詞にあまへそみ升ぬが何と此内中に有物何なり共わけとりにして夫でどうぞそまして下さり升るまいか
太　サアこつちらもどふなりとして帳面を消して跡も商もして進せたいとさまさま立もそうで有ふな
宇　サアいつち役に立ぬは夫其雛の御道具其が分散したがよいわいのふ
治　まづはかゐじけゐい去りながら死んだ嬶アがあれへのゆづり小冬よわりやおしかろふナア
小冬　イエ〳〵どふぞ私しや今の方へ行ねばならぬじやゐいか其ゐらなんのいらぬ物皆〳〵しんせまして下さんせ

治　チ、おとなしゆようういふた其かわり金都合しあふ是よりよいのをおと、が買て
やろうぞへ太治兵衛殿そこよろしく頼み升るぞへ
太　チットよし〳〵おれがせり合てやり升しよ
　トこちらの雛の道具を皆〳〵持出して道具市のよふに成
太　サア〳〵こんな紙雛二女夫流墨塗の紫宸殿○サア〳〵何ぼふ〳〵
五　チット此雛おふ四百じや〳〵
太　まつと見直したり〳〵振直して御てんぢや〳〵
五　御殿おら五百よ取ふ
太　おつと五百で御殿が五助
　ト御殿を渡す
太　太兵衛に左近の櫻を渡し右近の橘宇兵衛へ落た○梨地の田楽小粉盆是も碎けて
　有まさいくの菓子納戸長持戸持も底抜け井戸皿鉢七りん六枚屏風破れつゝらの
　り物壹挺まな料理人共買おけ直か出る琴はつんてんころりでしやん〳〵手拍子
　打ばんそろばん〻高三〻三百三文分散慥に受取まさた
　ト右の文句のしな〻おの〳〵雛臺一式の諸道具せり市よしてめい〳〵ふろ
　しきにつゝみ太次兵衛かまへつゝいを見て
ホ　いつち直内物を買落した一ッべつひ銅のかま○ア、儘よ是りアお娘に進よ
　ふ殘して置升ふサア是でさつぱりと帳面消して置升るよ

上　ト皆〳〵矢立に筆にて帳面を消し皆〳〵捨せりふにて下手へは入る
　「烏丸から真黒な繻かひ錢屋の手代多助
　ト此上るりにて多助向ふより出て
多　ア、内に居ればよいが
　ト内へは入る
多　チ、治左衛門殿堅く今日にもまそうとある五十両はいかゝんでも持て來る等と
　親方の腹立ひりや有まいがな
治　ハイイヤもふお道理でムる十一年跡悔めが取逃した五十両了簡づよい旦那なり
　やこそ私しが証文で是までの御宥免夫も去年の極月で十年の年切れまた其上に
　今日まで御用捨に預かつた御恩
多　コレ〳〵いわいでもしれた事を長く云はぜと手みじかよいふたゞよいわいサア
　〳〵金を渡し成れい
治　ハイ〳〵左様なをば御苦勞ながふ島原の桔梗原までお歩み被成て下さり升せ
多　ム、いつてどふそるのじや
治　サア娘をつとめ奉公よやりまとる等で見目ゑもさせて置ましたれば呑込で貰ひ
　先がりして渡し升ふ
多　ム、其に違ひない事なら行もせふ
　夫い御苦勞○小冬よ内を頼み升ぞよ

小冬　アイ〳〵
多　ハテ埒のあかぬ早く山れいのふ
治　ハイ〳〵
小冬　それと、さん杖と
治　ヲイ〳〵
上　「せわしのふせがみ立られ盲目の杖柱らより便り成る子を傾城に島原へ廓をさして出で行し
ト多助がつく〳〵いふて治左衛門と向ふへは入る
上　「年は行ねど孝行を守り袋は筐ぞと肌身に附て亡き母に逢見る思ひひとり言
ト小冬は首ゐ掛たる守り袋出して
小冬　是か、さま怪我にでも私しの體に疵付たらやつぱり親のからだに疵付るも同じ事といわしやんしたれどなアひよんな事でお山にでも成たゞ澤山に指でも切らねば成らぬげか
上　「また其上に親方につめつたり叩かれたりをるといなア
小冬　私しはこをふて成らぬ共嫌といふたらと、さまの爲めよ成ぬが悲しさに賣られて行は行けれどかならぎあんじておくれなへ
上　「いひつ、袖のひたぬれに涙流の里へ行地獄の様に思ひ取子供心ぞ道理なり
ト小冬始終うれいのこなしよて叩かねの音をる

上　「されば三界にやど忘らぎ樹下にこのみをあまんぎる木食上人諸國行脚の志ざし伏家の門ドに立休らひ打ならを鉦の音いろに小冬は立出
ト鉦かねの音して鼠の衣も槇の木笠にて高下駄をはき錫杖を持胸に叩がね撞木を持て蔓づとを脊負て向より五右衛門出て花道の中程にてこなし門口へ來て鉦を鳴し小冬こなし有て
小冬　本日の二日は大事の命日佛壇のまへでと、さまが笛と吹うしやんを譯て此二日は證月命日じやげなぞれ入升ふ
上　「かい立てとゝかぬ棚のはた錢よふやく取て庭よ下り
ト小冬棚の錢を取る思入トゝ取てきて
小冬　進せましよ
ト錢を出を
上　「進せ升ふと差出を其手をしつかり外から取り
五右　我が名は小冬と云ふか
小冬　アイそふじやけれどこちやねから見知らぬ坊さま手を放して下さんせ
五右　ヲ、二ツの年別れたが見知らぬも理りおりや我の兄の友市じやわい
小冬　ヤアそんならお前は兄様かちいさい時であつた故私しはしらぎに居たけれど我には兄があるぞとのと、さまやか、さまが毎日〳〵い、出して大ていや大方のあんじではなかつたによふマア戻つて下さんしたなア

上　「嬉しいわいなと立つ居つまいたとしんみよりそひて小冬をぢろ〳〵見まわまて
　ト小冬笠を取たり錫杖を直したりいろ〳〵有る五右衛門そこらを見まわして
　なし有て
五　ム、古郷の石川村に居られた時よりは猶さんそいなくらしと見へるが親仁や母
　人は達者なか
小冬　あのか、さまは去年死なしやつたが其からと、さまが目が見へぬわいのふ
五　ム、頓死でもしられたか
小　イ、エおまへがあまり戻りやしやんすが遅いゆゑに夫と苦にやんで
五　ム、夫で死なれたか
小冬　アイ〳〵
五　ム、親仁の眼病もそこら當の事でわろふシテどつちへ行れたか
小　アイ留主でムんそ
五　ム、そんなら戻られるまでこうして居られまいドレゆつくりと寐てまとふ
小　ろんなら是を
上　「そんなら是をと差出そは油しみたる切かづた
　ト小冬あたりの木かぶた枕を渡そ取て
五　ヲ、此枕も馴染じやわい
　ト五右衛門枕と取て寐よふとそる處へ二枚折よせ折柄

小冬　ヤア此と、さまは何してぞ戻つてくれたがよいのになア
上　「待子よりまたる、親はうき事を目あ覺へねど心にはあぶる、涙押つ、みしほれ
　我家へ立歸る
　ト治左衛門向ふより杖つきてひよろり〳〵と内へ這入る
小冬　ヤア戻らしやんしたか嬉しい事じやわいなア
治　何の嬉しかろふみそ〳〵ならくへしづむつとめ人をいそ〳〵として見せる心根
　がいぢらしいわいなア〳〵
　ト泣く
小冬　イエ〳〵兄さまが戻つてムんしたに依て嬉しいのじやわいなア
　ト治左衛門是を聞て悔くりして
治　ヤア何じや兄が戻つて來たか
小冬　アイ
治　そりやそこにどの様の形ちで
　ト嬉れしきこなしせき込で
小冬　アイ衣と着て鉦を叩いて
　ト治左衛門きつくりして
治　ア、坊主に成戻てつたか○ア、坊主に成てかいヤイ
　ト此時上手障子の内より

五　チヽ、親仁殿戻つてか
上　「屏風かひやり打くつろぎ
　　トニ枚折をかいやりて次左衛門そりよつて
治　ヤレ友市かいやい兄かいヤイなつかしかつたわいたかつたわいヤイよふ戻つて
　　たもつたのふ何よりは自然で
五　こなさんも達者で久しぶりで逢まそるのふ
　　イヤ久しぶりの間かいヤイ十一年の其間長の年月を夜るも日るもよふ案じさし
治　たるア其かわりゐは又是からも片時も傍放しはせぬアもふどつちへもいけて呉
　　るなよそふしてまア得道やつたなアイヤもふちひさひ時にはきつい手習さらひ
　　であつたが出家に成程で有たなら手もよふかくよふゐ成たでわろふな四角な字
　　でもよめるゝ寺持にでも成たかドレぞの様な僧拵じや
上　「からだ中を撫まはして
治　コリヤどふじや衣は着ながら頭巾の下月代さへそつてないぞ
五　ハテうばそく成れば髪は有髪でムんもわいのふ
治　ム、修行じやさまのよふの物じやなア
五　マアそんな物じや
　　マアてふまて此よふに親子兄弟揃に附けても思ひ出もは婆の事今息引とる際ま
治　でもそのさの事をいひ死に去年の秋に死ゐやたぞ

五　サアそふじやげにどんも
治　ヲヽそうじやわいのふそれからおれも此様に生れも付ぬ明めくら
五　ろれは不自由な事でムんもそのふ
治　不自由な段かひ何が鍬鋤の働は成らぬ有もせぬ物を寶喰にして居るが今でのな
　　りわい見てくれわんとけ破つたよふの内に成たでわろふがのヲヽそれで氣が附
小　く小冬よ兄がひだるかろふぞよ
　　サアそれ思ふたによつて雛さまの此かまで
治　サア湯立飯に仕たがよいドレ手傳ふ
　　ト小冬は雛の釜れ下を焚附る治左衛門手傳かゝる在郷唄に成り向ふより桔梗
　　屋才兵衛駕を舁せ出で來る
上　「駕の棒ばな門口へぬつと入れさそ傾城屋
　　ト駕は門口に待せ才兵衛内へは入て
才　治左衛門殿先程は逢升た約束なれば向ひゐ來た奉公人を連ていに升ふかいナア
　　ト小冬恟くりして
小　とゝさまもふ行ねばならぬかへ
治　サア金受取るゑ證文は判をそるやりとむのうてもやらよや成るまゐ
　　サア行は行けれどあまり急なので恟りしてどうやらおなかがいたむわいのふ
　　トこゐしある

才　チットあんじまい〳〵上はらが痛くば吉野太夫がかむろあしてまだ一二年は痛ひ目をさせぬ程に

上　「とたらそにぞ

五　イヤ是親仁殿おれが戻つたからはあれを賣に及ばぬわい

才　ト才兵衛恟くりして

あゝ是〳〵そこの坊さまいやな事をいわつしやる及ばうが及ぶまいが金渡して証文が濟だりやこちの代物

上　「是此證文の有からは

ト證文を出して

五　及ぶまひとて及ばして見せるぞや

才　假令また金立るといやつても元の金ではもういかぬ

五　ドレ其證文よこせ受取ふ

上　「くわらりと投出せ二百両

ト五右衛門二百両ほり出せ才兵衛恟りして

才　ムゝ是は尊ひお寺の金なら正直違ひは有まひ此まゝで貰ふていのふ左様ならば證文をお渡し申升る

ト證文を五右衛門の前に置

才　申し駕の衆サア〳〵いに升ふ

上　「トから駕ゑのせた小判の耳染もさつても厚いと言そて、駕を昇て出て行く

ト早き合方あて才兵衛駕屋走りは入る

「親子はあきれて居たりしが治左衛門は居直て

是兄そなたはさんと金以ていやるのふ

治　イヤもふ日本國中の金は皆おれのものでごんそわいのふ

五　コリヤ娘けさわれにあづけて置た物はどこに在ぞ

治　アイそりや爰に

上　「取出し開らく人相書

小　年の頃は二十三四春の高サ五尺六寸

上　其次ぎゑなんと書て有諸て見い

小　アイ色白あして鼻筋通り左りのさきに鉛疵あり

治　此り通の盗賊の張本石川五右衛門といふは

五　イイ

治　ト本つりがね兄へ

五　ムゝそりやおれの事じや

上　「ひけもみわげておくわぐら治左衛門はひざつきかけ

ト治左衛門書そがたを釜の中へ落しびつくり五右衛門のそばへつき掛て合方

あつらへに成り

治　ェ、思へば〳〵詰ないとふ〳〵大盗人に成り居さなァ三ッ子ゐ附た癖八十迄と
やら七ッ八ッの時分ゥら只人の物をほしがる性其時分は相應に暮した故召使ふ
女も男も有たれどとかく和子様の手が長ふて勤めよくいわいのィヤ用心のわる
いわの内方じやとれ後よは泰公人もゑ勤めぢ折檻それぢ聞かばこそ人中見せた
ら直ろふかと十二の年に泰公にやると其ま、とりぶけりけふ娘を賣た其金もわ
れが首代じやわヤイ其に何じや勿体ない大まいの金と土砂の様に持なやむ罰あ
たりめ祀附の廻る糧なれば大それた仕事をしたに相違わないそりやもう千万だ
ら悔んだとてかへらぬ事で有るけれど其ヤァ屈竟なからだを後手にくゝり上ら
れ浅間しいちんば馬にのせられて

上　「京落中を引まわされ

治　親孫ゐ迄最じか、そのゞ

上　「本望か

治　コリャヤイ命一ッそてや夫でよいと思つて居よふけれどなァ其捨る迄の苦しみ
がなみや大抵の事かいヤイ今でも性根が直つさら氣づかゐをるゐ其罪は此親が
引受名乗て出ても助けて見しよふ子の病ゐ死ぬる命拷問張つけいとひはせぬ其
人間に成つてくれ是じや〳〵

上　「心ない草や木もたむれば直る物じやぞよ

治　親はどゐ子が親を思ふ物なら何のヤァこんゐ事ゐ成りやせまい去りとは根性直
して〳〵れ是じや〳〵

上　「手をあわせ泣あせれ其いかな事ぞぶとひきせる横ぐわへそらうそむゞてふくば
かり

治　ト治左衛門手をあわせ拜みいろ〳〵思入五右衛門そしらぬふりにて煙草を呑
居る治左衛門あきれ

上　くつ共すつ共いわぬのか聞入れぬのじやなァよいわ此上へぞふなと勝手ゐ仕を
れ

治　「勝手にせひと親子中破れぞふりのそて折ふるびし小あい口そらりと扱が手に取
付

小　トこふりの中より相口を出し腹切ろふとそるを小冬留て

治　アヽとゝさまつて

小　アヤ留ゐ〳〵是から一日でも生ているほどゐいつが成敗に迄をまりよふのもの
じや

五　イエ〳〵それでも死ゐしはせぬ兄さま留て下さんせいなァ

治　コレ親父さまコリャ何をそるのじや

五　ムヽ留る氣なら性根を直そか

治　ハテ役にも立ぬよまい事
そふいや死ぬる

五　そりやさせぬ
治　エ、放せヤイ
五　イヽヤ放さぬ
治　イヤ放せ
上　「引合ねじ合面倒なとも〻ぎ取捨る劔先にあたる娘が因果さま
　ト相口を引合笞みに小冬の胸板に立小冬倒れる五右衛門悔りして
上　「南無三寶抱ゞれば
治　兄よ〳〵娘は何としたぞふたヤイ
上　「撫まわる手先にさわる合口はむざんや小冬が胸先に驚く親仁は半狂亂
　ト治左衛門撫廻る小冬の胸に相口の有ゐ悔りして
治　ヤア〳〵是まア何たる怪我災難ゐ逢た事じやぞいヤイ此樣の事の無樣にと願ひ居るじやないかいヤイ神や佛やよ胴欲な聞こへぬわいのふ
五　親仁どのコリヤもふ所詮助からぬわいのふ
治　エヽ其樣の事いわぜとどうぞ助々てくれいヤイこんな非道で殺したらしんだ婆ばへの云譯は何と有ふぞ
上　「正体も更ゐ泣入て伏しづみ居たりしが何思ひけん立上り汨ながらに佛檀の内に備へし漢竹の笛諸共に取出したるかたみの品々
　ト治左衛門大泣に泣入りふつとこゑし有てそろ〳〵ざぐりより佛だんの中より持參る

治　さて〳〵恐ろしき人の恨まづ此樣ゐ報わねば成らぬ因緣因果經是見てたもれ
上　「と手に渡し
治　アヽきのふけふに思へ共早や二十三年跡の今月今日丁度此樣のことく雨がふつて物凄ひ夜道を芥川にかゝる處で癇に苦しむ武家の女行かゝつて見そてられぜさそる手先に金財布見るよりふつと惡念の起つたは何事ぞ大恩受た親方の難儀が助けたさどうぞ借して下されとやつゝかへしつそる處ゐ欠付られては成るまいと胴欲にも切り殺し行ふとしたれば疵口からおぎやア〳〵と赤子の泣きごへとりあげ見れば月代も延びたるたくましい男の子ヤレ不便やと其場で直ぐに發心してひよんな事しました其代り此子は私しが子とおもして育てゐげ成人さし升ふと亡者にきつと契ひを立て取育てたは友市我じやわまやかせば手に合わやく物叱ればかへつておれをにくむ其顏は母御が息を切ときおれを恨むだ其顏に似たとこそいへ其こはさも可愛そにまぎれて是程迄に育てたが最早罪障消滅して母御の恨も有まいと思もひ募せど恐ろしや天道樣の惡しみにて月も替らぜ日も替らぜ終に娘が身ゐむくい因果の懺悔しらぶる横笛其一軸此刀も母御のかたみ又て、御を尋ぬるにも此刀がよい證據此親仁はこゐたの爲には仇かたき切るなりと突おりと殺して下されコリヤ娘必らも我は恨んでくれるなよ
上　「身も浮ばかりおげくにぞ小冬はくるしさまぎらして

ト小冬こゝろ付くるしながら目をひらき

小　コレと、さま

治　ヤア

小　氣遣しやんなお私しや死にやせぬ〳〵けれどおアひよと私しが死んだならかゝさまと一所にたづさへてはしい

ト五右衛門の顔を見て

小　是兄さまと、さまとせり合ゝと中よふして下さんせ頼み升る私しはと、様がいとしい大事にかけて

上　「トいふ内も次第〳〵にいろ替り手足をちゞめ四苦八苦

治　コリヤ娘ヤアイ〳〵

上　「呼べども聲の立兼ぬるおしや苦みのちらせしは花の姿と壬生寺の鉦やあはれを

五　そへぬらん一心不亂五右衛門は一卷とつくと讀終り

ヤ、、此けいづて見る時はおれは百性の子ではなく先祖は正しく藤原にて我實父こそ岩木兵部といふ諸太夫いつぞや山川にて手に入りし片袖といひ○是より望みを大きくおし一日たり共高位を望み○ならゞば一生盗人くらし一日暫時思もない誠の親より大切なこなさんおばヤア何でわれそれうテイ

ヤア〳〵何と云そいやつばりおれをゑん實の親と思ふて

治　ヤ、盗人程義理に苦をやむ物はごんせぬわいのふ

五　ヤ、よふいふてくれたかたゑけない忘れはせぬ

上　「わもそれはせぬとそがり附き肉身しぼる嬉しなきことわり責てしらせし成り

ト本つりがねゐる

上　「ひるはきつもつあしから金藏

ト そゞき相方やはり本釣金にて向ふより足柄金藏出て門口に來て

金　頭ら〳〵〳〵

ト五右門金藏が顔を見て

五　ヤ、足柄か遠慮に及ばぬ這入〳〵

金　ヤ、イ

上　「ヤ、ト心得振かへり招けば跡から三上の百助堅田の小雀め數多の同類一様に鎗々得物を肩に掛ばら〳〵と出來る

ト金藏向を見て招く右の合方本釣鐘にて三上の百助堅田の小雀其他手下大勢皆〳〵盗人の形一本ざしいろ〳〵の持物を持出て皆々本舞臺へ居並ぶ五右衛門見廻して

五　コリヤ堅田よ此中に鯱の虎藏が見ゑぬがどふしをつた

小雀　されば いのふこなた様の配附が廻つたお依てお頭のかわりに成てばらされに行と云てきのふ名乗て出をつたからは頭の身の上氣づかいおい何と出かしおつたじやごんせぬか

五　こゝいつならそうで有ふけなげな奴で有たなァ
金　イヤ是頭あれ斗りじやないまさかれ時に成たら仲間の者は
小　皆こなさんの代りに成氣じや
皆〳〵　是見て下さんせ
　ト手下皆〳〵上衣とぬぐと五右衛門と一の形に成る
上　「是見やつしやれとぬぎ捨る姿も髪も一様に揃ひし中に金藏は一チ花立の取自殺
金　扨夕の働らきはくれぬ先からりんばつて十七八の振袖は姉が小路橘屋といふ三味線屋とてちんなしお踊り込み娘を押へて取て來た小袖のゑり數三十八黒塗手箱よこはれる程一分の數が千五百頭に磨めて貰ひ升ふかひ
五　コリヤ、イ雀も百もをぞつたかよ
雀　イヤ忘れても此後は公家の處へ這入るなよ
百　成る程小雀さへぎる通り位と暮がお揃被成らぬ沓かぢりみんな裝束白丁ゑやし
上　「押ならべてぞまじ兄がは
五　此外に何も無かつたか
百　本にそれよ此様の結こふな箱の中よ六ッケしい字の書たきたない紙が入てふん
　そわいのふ
五　チ、そりや一束吉本りんし紙じやこつちへよこせ
百　ム、、、

上　「とさし出そを
　ト百助が綸紙を取て渡そ
上　「押し開き一ト目見るより舌打して
五　ハテよい物が手に入はよなァ
金　頭それが何ぞに
皆々　なりやさんそかいのふ
五　チ、なるてコリヤ足利家へ天下からあづけて置た太政官の御正印返せと有勅書ム、奥羽中納言氏定承る爰が仕事じや此の中納言氏貞にをれが成るは足利家へ入込み太政官の印を受取ふといふは所でそれがないは無い筈じや其正印い疾より紛失して有る噂サそこで言譯が成らぬから迷惑仕おるはそこを附込んで大金よそるか但し義輝に腹切らそかどちらにしても甘まい仕ものよし又づきが先へ廻り行そこなうたら元々〳〵じや○ドレお公家様に成て見よふか
金　それじや頭はお公家様に
皆〳〵　あらんそのかいのふ
五　コレ百よかみそりを取てこひひげをそろふわい
百　合点でごんす
　ト是あて兄弟手盥かみそり砥石を持てくるあつらへの合方に成りひげをそる

そうして公家の供廻りは
ソレ仕丁が三人
ト手下帳面へ扣へる
アイよふごんそ
諸大夫
よし
雑掌
よふごんそ
くつもち
よし
はさみ箱
よし〳〵
ドリヤ裝束を附よふかひ
トひげを摺仕舞ふ
「不敵の仕丁で開にたまらぎ治左衛門なけきをわそれ歯をかみならし
エ、恐ろしい工み事ならぬさせぬ
ト治左衛門そがり付を振拂ひ企藏トかねる五右衛門一間へは入る此内手下皆〳〵裝束を附る百助又企藏とかねる皆〳〵おかしみせりふみへ裝束を付し

金五　百五　雀五　百五　雀五　雀五　上　治

まい
金　殿上人ハ
皆〳〵　お頭様
ト此時障子家体の障子を取る中に五右衛門公家の姿にて立身にて去づ〳〵出て來る
治　コリヤ其様な横道なことして其がまつそぐに行ものかい此様あいふに用いぬのはおれにあいそを盡されよふとそるので有ふけれどいつかな〳〵亡者にきつと受合た事じやもの火に入なら供に火の中でもついて行はい○今迚も間入ぬならもふおもひ留まいが是此僧の笛の音をせめて母の詞と思ひどふぞ留てくれいヤ
イト治左衛門笛を吹く
上　「吹そさむ笛の音いろのもふろふと
ト吹笛の音にて大ぞろ〳〵と成り思ひ入有てシヤント留る五右衛門おもひ入有て
金　今の不思儀わ
みな〳〵ありや何ぢや
五　何んぞのあれであろふわへ
上　「行をやらじとそがり付親の心を知ぬ子のふり切袂とり附袖
ト治左衛門そがり附を引廻してポンと居るが木のかしらよろしく淺黄幕

本舞臺造り物野面西山の壬生村のもやう道具納まる

ト鳴物に成り向ふより矢場拵箱一習長柄鎗臺傘立傘其物侍十近習供揃りよろしく出て來る上手より五右衛門は公家の拵へにて下手仕丁長柄なんどあて出て來る手下皆〳〵よきほどに

皆〳〵　下馬くわんたい〳〵

ト此時乘物の内より此下藤吉き付け長上下大小はいながら出て五右衛門の顔と見る双方顔見わしき見合有と

皆〳〵　下馬くわんたい〳〵

トこへ〳〵ゐやかましくいふ東吉ハイ〳〵と尻むけに成る手下皆〳〵付そひ向ふへは入る鳴物しやんとやむと藤吉そつくと立て向を見込む上手より治左衛門よろぼひながら出で來て

治　兄よもふいつたか兄ヤイ無事で戻つてくれよ

ト藤吉あつきあたる藤吉治左衛門を引廻してトント下にぎばさして治左衛門の持て居る笛を取胸倉を取て治左衛門を見込むが木のかしら又藤吉向を見込むよろしくきぎみ幕

足利家別館の場

一此下　藤吉
一三好長慶
一足利義輝
一三好四郎國長
一堅田小雀
一上百助
一足柄金藏
一天埜
一星合宮内
一入間丹下
一白須賀左京
一粂川但馬
一石川五右衛門
一芙蓉
一綾の臺
一こし元
一近習四人
一忍び貳人
一軍兵大せい

造り物定の間上手障子家体下手も障子家体其中三間の間前側障子〻切有る後引戸事有右幕之内赤澤丹藏松浦大八山内段平大形久馬おの〳〵上下大小にて並び居る所作のちらして幕明る

丹　藏　何れも御覽示されたる足利の御殿の内は揚屋同前
大　八　左様で厶る晝夜の分ちなく呑や諷へや三味の聲
段　平　太皷まつしやわこし元同前
久　馬　長慶殿の計略の通りまんまと義照とば馬鹿物に仕上げ
丹　足利武將を押領せん三好殿の御企だて
大　八　それにかぶんの大小名
段　やがて天下わ長慶殿
久　馬　隨身のわれ〳〵が立身出世
両　人　お互に御目出度存じ升る

ト此時酒宴ゐ成わわし引ぬく義てる大將の拵へしとねの上に座し蒔繪附のきやうそく刀かゝる侍にけいわいふよふの膝にもたれねむり居る引懸先こしり
元ならぶかたゑに花籠有り

琴　歌「雛鶴が其枝〳〵に巣をかゝて君もゆたかに我をもゆたかに住める民迚久かたの
芙　蓉　長慶殿の斗らいで此間から御殿へ上り晝夜御傍放れぬ嬉れゑさ我身の果報を思ふに付おいたはしいは御臺殿どうぞ御機嫌ゐ直し被成て

義　輝　ア、又かいやい一体アノ綾の臺は關白家の娘で居乍歌書は取置軍學好女子の罪にいけもせぬけんじつやはら武家めかすか面倒さに目通りは叶はぬと遠ざけ置たる君への心中何んとにくうは有まひがの
ト もたれかゝり云ふ此時橋懸りか青ば出て
青　葉　御きん中綾の臺殿御機嫌御親と有て是へ御越して御座りまそる
儀　ヤア予がゆるすといふ詞も出さぬに推參千萬詰所の者ども遠慮に及ばゑ追かへせ〳〵
芙　イヤ申我君様左様有ては御臺殿へどうも私が濟ませぬ何卒御心和らげられ御臺殿を此所へ
義　成程わりなき芙蓉が頼み然らばゆるそ是へとヤせ
芙　又もや御意のかはらぬ中ちつとも早ふ
青　葉　心得ました
ト 向ふへ向ひ
青　葉　我君様の御意御臺様にはイザ先是れへ
綾の臺　ハアハ、、、、
上　「ハツト答へて御臺所時めく花も下盛今わ涙の綾の臺御座の間近く出給ふ芙蓉わ見ち
ト 綾の臺跡ちこゝゑ楓て付て來り

芙　何に仰と云ながらあさりと云ゑば勿体ないマア〳〵是へ御出遊ばせ

上　「マア〳〵是へと御手を取り御傍近くかし付て

芙　賤しい此身を殿様の御てうあい嬉れしい中にも悲しみわあなたを御傍に召れぬも皆けいせいめがわざ成とおさげしみがはづかしい

綾　イヤ〳〵そもじの業わわあらで皆な〳〵自が心得違ひ此上わ我君殿御さげんに叶ふ様に聞及ひくるわの風俗しやれた詞のつかい様を指南してたべ芙蓉どの

芙　あられも無い事御意わそばを賤しい廓の物云がどうマア教られ升ふそいなわ

綾　イヤ〳〵お心に叶ひなば詞わおろかけいせいの跡わけとふるも殘りなう自らに教へて玉ふ

青　葉　わの様におつしやるも無下にそるのも心あい

綾　くるわの風も

かいて　何事によらぎ

綾　物云様もしこなしも

真　葛　おしへておあげ

みな〳〵なされいナア

芙　そお云譯なら及ばぎおがら

綾　どうぞ傳授を頼むわいのう

上　「武家の貞心勤の誠いづれ愚かわなかりける武將御さげんうるわしく〳〵

綾　ハテどうなつても御差圖わもれまそまい

芙　夫じやと云て此マア賤しい小袖を

綾　何の〳〵詞を背かぬが女乃道互ひに衣服をとりかへてお宮仕へも又一興で有ふわいのふ

腰　元　ホンニコリヤ能ろうわいのふ

上　「の玉ふ内にこし元共禿引船めい〳〵にお納戸小袖晴衣裝くるわを舘の付〳〵が大將御らんじ

義てる　出來た〳〵御臺の芙蓉けいせいの綾の臺ついでに其形りで揚屋入が見たい〳〵

綾　コレハ文御なんだい

よしてるいやなら目通り叶わぬぞ

綾　イヤ全御差圖わ

義　背かぎば早く揚屋へ入るを

こし元みな〳〵御始め成れい

ト此時向の納戸の内ゐて

ふれ込　お勅使の御入

義　常の堅いを取置て傾城の真似せうとわ唐本に有無点の千話文紙がかわつて面白ひ迚もの事か奥と芙蓉両方衣裝取替る此趣向が得心なら目通り免そがどうじや〳〵

義　我遊興よ出來置く此御殿へ心得ぬ勅使の入來直ちに逢ふも面倒ぢや芙蓉取次致せよ

芙　あの目ちよかしこまり升た

綾　さよう仏らば我君様

義　皆のモノ

皆々　入らせられ升ふ

ト哥わ成り義輝御臺わし元皆々芙蓉に付添ひは入る下手ゟ長慶國長出て大名殘る

長慶　御勅使の御入と有わ何れも御出迎ひ

皆々　ハット〳〵

ト國長皆〳〵直ふ

御入り

長　御勅使殿よわイザ先是へ

皆々　御通り下され升ふ

ト平伏そると是にて五右衛門花道迄來りよき所にて

五右衛門　旁〳〵出迎ひ太義にてそわを

長　御勅使殿にわまづ〳〵是へ

みな〳〵御通被下升ふ

ト五右衛門てなし有て貳重へ上る長慶上手へそわる

國　勅使にわ遠路の御光駕御苦勞千万しかしながらぞんじよらざる不時の御入拙者管領三好修理の太夫長慶の悴四郎國長と申者

長　勅旨の趣承知仕りたふ存じ升る

五右衛門　勅使の趣余の儀にあらぎ武將義輝さいつ頃ゟ此志賀の別業に引籠り晝夜の游興剩さへ參内と怠り禁庭をかろんぎる條逆鱗もつての外故預々置れし太政官の御政印かく申中納言氏定受取歸へるべしと有則勅書急ぎ義輝に傳へて能ろふ

長　コヲ存じ寄らざる勅定武將義輝何が故よ禁庭をかろんぎべきや察そる所侯者より證書と入御政印を預り奉るわ日本惣追捕使の義輝の規模片時も御傍になくて叶わぬ大切の一品

國　父長慶が申通り武將たる身を以て諸大名歸伏させたるゟ御政印なくてわ心ゟ任せぎ夫れを過急に差上るとわ近頃迷惑

長　此儀わしばらく御猶豫の義を

両人　願ひ奉つる

五　ソリヤ叶わぬ綸言汗の如し帝の勅命出てふた、び歸るべきか

長　サア其儀わ

五　不屆千万一時も早く差上て能ろふ

長　サア

サア
サア〳〵〳〵
長慶サ、、、なんと
其勅答わ綾の臺方致し升ふ
「色香やさしき物腰も御臺姿其儘に移そ芙蓉が酒機げん朱のもそそもほろ〳〵しどけ血居るまん中へおめる色なく卷舌に
是わ御勅使殿かいな自わ義輝が御臺綾の臺御見知り被成て被下升ふ
「ト云顔見とれてうつとりと處義もくだくる勅使の目つかい
ハテよい器量わてやか〳〵して勅答わなんと〳〵
ハイ其御正印とやらわ御館にふんせぬ
ヤ、おんと
失ひましたわいナア
ヤア大切な御正印失たると斗りにて相濟ふか長慶なんと心得居るぞ
ハ、ハア
露顯の上ゑわ包むに及ばぞ何物のしわざにや御政印を盗み取て有所知ぞ是と申も義輝公の身持放埒けいせい狂ひのおどもがつもり積つて其難儀
ヤイ〳〵悖だまりおろふぞ
イヤこりや國長偽わり申さぬつもり〳〵今の難儀

五
両人
五
芙
上
芙
上
五
芙
五
長
國

長
芙
五
芙
五
芙
五
芙
五
國
五

まだ〳〵控ゑおろうぞ
ハ、ア隠すより顯れるわ安そし惡事千里と世上のうわさハテ是非なき次第じやよな
ト五有衛門立つ
ア、申お勅使殿にわどれへおいで
預りの御正印紛失の上勅使もふけの作法もなく某しをかろんぜる義輝が振まい
奏問の上後日の沙汰に及ぶで有ふ
サア其御腹立わことわり乍有の儘に奏問有てわ我君殿の御身の大事どうぞ首尾のよいようにお取成お頼ひ申ア
余人わ格別御臺の頼みいなむにわあらねどもそなぞる網ゑ心あれば千尋のうろくぜも心なしとわいわれまじ
仰に心有そ海ふかきねがいの自がむねさへ休めたまはば
さそれば網に引る、心かな
花ならでかほる一木を君とせばこはる、胸の程もしらせん
ム、ハテ面白き口ぜさみ氏定殊に政印詮義の間百日の日のべゆるしくれる
イヤ其日延御無用に被成百日や二百日でたやそく知うふ樣がふらぬ
だまれ重き落度もかるく取斗ふが大やけの御仁政足利の祿とはむ其方が主の非を上るわかに事

國　サアそれわナア
五　サア
両人　サア〳〵〳〵
五　ハテ思なやつ御臺のせつなる心あめんじ日延のとりなし致そで有ふ
長　イヤ執奏ゐ、お願み申さぬたとへいたせば逃足利の權威を以て後とも申さずたつた今授し出してお渡し申さふ
芙　そんならお前が
長　お氣遣い被成る、な万事わ拙者が胸に厶る
芙　それでも
長　サアよふ厶るてや和田の原こき出て見れば久かたの雲井に紛ふれきつ白浪
五　なんと
長　サア其白浪の立せやうお勅使殿にわしばらくの間遠殿にて
五　ざんじの用捨致して呉ふ
　　トより添ふを皆々こなし
芙　御勅使様には
五　然らば方々
皆々　まづ入らせられ升ふ
　　ト樂になり五右衛門思ひ入芙蓉付添這入長慶こなし有て二重へ上る國長諸士

上下別れて

國　親人
四人　三好長慶さま
長　コリヤ
　　トおさへる席の舞に成る二重上下ゟ大名四人をほふ立ゑぼしにて出る
丹　長けい殿けいやくの通り
久　心變せぬちかいの血判
犬　御定めたる上からわ
段　イザ御受取被下升ふ
　　ト連判帖渡を長慶取てひらき見て
長　二心なきおの〳〵の心てい長けい滿足〳〵かねて約定の通り大望成就致さば一國一城の主となさん則墨附き
　　ト墨附出しておかたへ渡す大名めい〳〵ひらき見て
皆〳〵　大望成就の上わ國郡をあたへ一國の城を當て
國　親人の直筆何れもらくしゆ召れ
皆〳〵　有難ふ存じ升る
長　申談ぜる子細もあれば
國　築山の傍よて万事の密だん

みな〳〵長けい殿

長　コリヤひそがし〳〵

ト長けいこなし皆〳〵こゝろしくあり早舞あて道具チョン〳〵カヘシ

造り物三間の間高御てん高らん付三だんとも登にかいの高らん附上下落間にして足代塀櫻の釣枝石舞臺のまへに三間の間みそれろしあるらん間の竹のふし此みそ巻上る事あり樂の鳴ものにて道具止る

ト上手方娘はつ梅ふり袖にて資來山を持出る青葉長柄丁子持出る下手より松が枝高つきあ小判の山もり持出る真雪茶ふくさ茶の湯茶わん持出る是にも小判澤山に入有皆〳〵御殿の前にならべて

青葉　御臺綾の臺殿のおもてなし鹿酒一こんめし上られ下り升ふならばありがたふ存じまもる

楓　ふつゝうなる私しがもてなし三好長慶の不調法の手まへ召上られ下さり升ふ

青　心をこめし其御くわし

かへで　お心に叶ひしものお召あげられ升ふ

ト此時みそその内にて樂あ成るとみそ巻上るゝ五右衛門わ前の形にてくる合引ふ懇り居る

五　種々のもてなし心に叶わぬ持て立〳〵

かへで　綾の臺長慶心をこめし品なれば

青葉　何卒御めし上られ下さり升ふけがらわしい持て立〳〵

三人　左様でわムり升れと

五　ハテ以てゆけと云ふに

三人　ハア、、

皆々もぢ〳〵して居る向ふ方此下藤吉長上下あて出る近習貳人白臺白木の箱乘持て出る藤吉妙よしを見てこなし

藤吉　見苦敷鹿茶のもてなし持て立て〳〵

三人　ハア、、

ト皆〳〵長柄島臺高附き茶わん持て上下へ別れは入る藤吉近習本舞臺へ來て

藤　臨時（りんぜ）のもふけふつゝかなもてなしお納めなし下されば役目の大けいひとへに願ひ奉る

上　「ありがたからんと敬それば見向もやらぬ

五　雲井にまじわる氏定へ石瓦といやしき此もてなし心にあわぬ持て立て〳〵

藤　ハア御意恐入奉るしかし生管領たる三好長けい心こめし此馳走自他御請を

上　「にじり寄りて顔ながめ

藤　ハ、、勅使と云われで有たかコリヤ友市〳〵ハテ扨コリヤ友市見ぬかほをなやい

五　ム、サ云ふそちわ
藤　見わそれたか猿玄やく
五　何じや猿じや
　ト五右衛門いろ〳〵と顔を見て
五　ヲ、そう玄や猿の助じや三州の犀がだけでつちの時分足もたし合た猿の助ま
　めで有たナア
藤　奉公先の朋輩同士あかき合た竹馬の友市
五　そつちも
藤　こつちもたがいに無事で
両人　こりやめづらしい
上　「壹度に両手を打くつろぎ
藤　扨マア夫れからどうしたぞへ
五　イヤモウぞうと云ふたら味ひ事もないものじやわい我と世り合ふた件の太刀を
　てまよふた迚かたつた所がはつが上つてやばな事ヤイやふ〳〵とにけふけても
　おや方へわ戻られぬ習ふがなれさ仕事と雪のぞきからやしよおどりとふ〳〵出
　ぬけさお頭手下ばかりが凡五六十も有ふかいろりやそうと猿よわりや谷へおち
　て死だと思たがけんよよもない其形りわどうしたのじや咄して聞せ〳〵
　さればやいおれも又難行苦行こけてわおき〳〵命から〳〵谷から上り得手物の
藤　かるじがくれ中村の親の内へわたよられぬ飯焚にもいたり子守にも成ととくれ
　こくれて十年あまりそらきを求めてどうやらこうやら中間奉公こゝにも例の尻
　そわらぬ黄金六両取逃して身のまわり拵へ小田殿へ有附た今の名わ此下藤吉
　ム、そりやわれが此下藤吉ゑらい立身をしたなア
　ハ、、何をいふゞい日本を凡取ゐしてから六十余州高の知れた事此位を立身と
藤　は友市なぶるないそして今我が名わなんと云ぞい
五　おれか盗賊の張本石川五右衛門
東　アゝそんなら我がアノ石川五右衛門か
五　ヲ、五右衛門とわおれじや
東　待てよそんならきのふ壬生村で行合た
五　不知案内ぶこつの侍ひ
東　下馬緩怠ととがめたわ
五　お使者の猿冠者
東　勅使の大頭
両人　咄せるわい
上　「と寢腹ばいはう杖ついて余念なし
東　時に斯じや我れもせつかく仕込して來たがソレ黄金三千枚ならよい酒手四の五
　のいわぬに持ていなぬかい

五　イヤいぬまい
東　なせ〳〵
五　今かふ元入をして來たからはとつと大きな仕事にしさい
東　去とわ丈夫に手厚い性根不足なか其金でわれに賣たいものが有買ぬかい
五　そりや代呂物によつて買もせうかい
東　どりや賣ふかヤア〳〵東吉が家系用意の品持參せよはや〳〵
　　トけつかるわいハヽヽ
侍二人　ハア、、
上　「はつと答へて白洲をかいて出るふしつゞら様側よ差置けば下部を遠ざけ
東　扨是れとや不相應な古着なれ共氣に入たら賣ふかい
五　何かわ知らぎぎれ改めて見よふ
上　「ふた引明れば着物にあらぎ差出た白髮の親の顔見るより手早くふたしつくり
東　何んと安ものでは有ふがな
五　いかにも賣買に成にくい此古着破れぬ内にきつさりと買ふて逝ふ
上　「裘東の袖まくり手ふとき心わ細引も義理のれんじやく遠の石川いせさとせこそ
　　此下がしがらむ詞の羽がいしめ
東　御勅使御苦勞
五　種々のきやうおう後日のたいめん

東　おさらば
五　さらば
上　「ト出て姿わ雲の上見ぬ鷲御簾の隙もる笛の音につれて聞ゆる樂器のしらべ
　　ト樂にある
上　「時にあやしや両人が帶たる太刀に音あつてそう〳〵ことして鳴ひらめく
五　ハテ心得ぬいま聞へたるアノ笛へに帶せし劔の音を出そは
東　ム、笛わ龍の吟ぎる聲勅使の帶たる劔迄共に音をなぞ同氣の合たい疑もなき雌
　　龍丸はそつちが奪ひ取所持せしよな
五　ホヽサスがの此下能知たり汝が帶せし其刀も共に音をあぞ奇ぞく扱わ雄龍丸の
　　一ふりを所持なぞよな
東　ホヽ云にや及ぶ足利累代雌龍の名劔合躰そるわ今此時サア雌龍の劔お受取ふ
五　イヽヤ汝が所持の雄龍丸こつちへわたせ
東　イヽヤ身共へ
五　イヽヤ某へ
両人　何とこしやくな
上　「詰寄〳〵双方一度に拔放せば實も龍勢昇降の威力を顯す劔の不思儀傍に有合の
　　花籠を水卷上つてらんまんと咲乱したる木艸の花形朝日に霜とちり失たり様子
　　覗ふ四郎國長

組子大せいハア、、

上　「御簾からげて綾の臺笛竹たそさへ立出たまへば久吉はつと頭をさげ

東　王生村において老人が所持の漢竹我手に入しを幸ひと御臺所の御聞せに達まし

　　らべゐあらわを劔の盗賊忍術を以て諸人の目をくらまそとも久吉が明鏡

綾　　億万里を見拔そおたの明さつ差圖の通り斗ふたれば國長わ四門をかため取にが

　　さぬ用意せよ

國　　承知仕升た者共つゞけ

上　「組子引連かけり行

綾　　最はやたそがれ御神拜の刻限

東　　四海の安きわ今宵の一擧

綾　　万事わ東吉

東　　まづいらせられ升ふ

上　「豆ひの手筈大書院引別れてぞ

　　ト三重かへし道具管絃に成

造り物舞臺先花道兩側惣一面半御簾家休塗骨障子せり上る見付わ大襖になる切幕戸家口共に金襖わ成大廊下の休也是より管絃わなつて向うより仁木頼秋細川和氏佐々木秀綱中條秀長宇佐美祐氏畠山清氏吉良定家上杉友房今川伸秋大友氏泰大宰頼房赤松貞助の十二人めい〳〵大紋立ゑぼし足利家大名のこしらへにてかざつてみな〳〵本ぶたいへ並よく居並び

仁木　いかにおの〳〵承られよかく夜いんに及びわれ〳〵コノ御別館へ出仕なせしは外おらぜ今日前ぶれもなく俄に勅使の御入りのよし

細川　しつけん三好長慶殿よりしらせの事何事なるかと出仕なせばかねてふんじつなせしト承る大政官の御印則刻出せよとの事

佐々木　勅使は名に逢う吳羽中納言に所せんゆふよう厶るまいト心配のその折り

中條　織田春永の名代として木の下東吉怪しきつゝらをとさんゐし御臺所へ申わけ今勅使ゐきやうれうトノ事

宇佐美　ぞふぞ首尾能く日延の願ひ濟はよし左もない時はお家の大事

畠山　殊に先達て中より武將には當別館へけいせいを引入れ給いちうやのわかちなく御酒ゑん

上杉　しつけん長慶殿をはじめ國長殿にもおいさめあれどおき、入れなく

今川　つよくおいさめ申しなばお手討に相成るとてたれ一人り御かんげんのなく

大友　それ故われ〳〵ぞんじ乍らつい見ぬかほ致おりしが此上は折を見合し御諫め申上げぜば相成り申さぬ

仁木　コノ事京都へきてへし故の事ならんが御家一大事の

みな〳〵事で厶る

トみな〳〵心配のこなしよろしくばら〳〵になつて上てよりいせんの赤澤丹
藏星合宮内いせんの形にていで來つて

丹藏　おの〳〵御出仕めされしか一大事の義がムる

みな〳〵一大事トハ

丹藏　さればおき、下され今日俄の勅使の御入り何事なるかとしつけん三よし長慶殿
をはしめわれ〳〵迄が伺ひし處かねてふんじつなせし御正印さしあげよとの事
みな〳〵とうわくのその折りから

宮内　先刻もおの〳〵方お申入れし如く小田の名代木の下藤吉郎あやしきつゝらと持
參なし吳羽中納言殿の面前にて何かはなしのその中お其つゝらもつて勅使には
いづくへやゝかきけそ如くそがたは見へぬ

みな〳〵ヤア〳〵〳〵

丹下　それぞ吳羽中納言とはいつわりにて

宮内　今四海をうぎやうなそとうぞくの張本石川五右衛門トノ事

みな〳〵ヤア〳〵〳〵

丹下　其故にこそおの〳〵にもとりにがさぬよふ四門をかため

宮　いかに五右衛門けんじゆつに達そるともコノやりたの出口〳〵をげんぢうおと
りふさぎ

丹下　とりにがさぬよふトノしつけん三好長慶殿のおさしづ

仁木　そんなら勅使トいつたはアノコノゴロ天下におうぎやうおそアノ
みな〳〵五右衛門でおつたるかヤア〳〵〳〵

トみな〳〵恂りそる是をよろしく上手床の所ヨリちう引のつゝら出とまつて
よきところにてといまる是をいせんの大名十四人さほよならんで恂りのこ
なし

みな〳〵アレ〳〵〳〵〳〵つゝらがちうをあるくは〳〵〳〵

トこの時仕かけのつゝらヒれて中より好みの形にて出きつトおつて

五　つゝらしよつたがおかしいか

ト急度なつて是をあつらへの鳴物になつて五右衛門は中引にてくうへは入る
大名は恂りなしてみお〳〵上下へ別れては入る是を大ドロ〳〵去らせよッ
きうしろのみそらん間を日覆へ引てとるコノ道具居處かわりにて心トいう
字を出

石川五右衛門住家場

一五　郎　市　　一三　上の百助
一片　田　小　雀　　一小鯛源五郎
一参二　五良兵衛　　一女房かたき
一石川　五右衛門

造り物平舞臺向ふふそま納戸口のうれんかけ有一間の押入上手に打廻ししやうじ屋体橋造りに門口此戸に仕かけ有袖かべ幕の内方お瀧世話女房形り鉢なし羽織にて針仕事して居る模様にて在ご哥あて幕ひらく

上　「針にひかる、糸筋やくるわと出て五右衛門が妻と定まる瀧川かしろとのわざをしならふてせんたく物のぬいく、りせわしき中ゑ五郎市を連て戻てつき合ゑ親子の中のそぶ〳〵わ絹の表にさらし裏はたつきわるく慕し居る來る人ことゑ悪物の三上の百助片田の小雀ゑんりやうなくそつと入り

ト三上百助片田小そゞめのぬそ入の形りざいご歌ゑて出

百助　エ、お瀧さまぬい仕事稽せいがてまずの

お瀧　コレハ二人づれでよふこそゐしわ置ねゑんぞ用ゑら言置て

百助　イヤ用といふて商賣づくコレ此小雀が在所片田のらくがん屋に嫁入が有てしつくりと見やげおとり込む相談に慕方からお殿が所へ寄合ゑそ扨も雀めよついでに今のをいわぬか

雀　イヤわをいへ

百　ハテいひに來ぢやをいか

雀　ヲそんゑら余の事でもござんせぬお瀧さんきのふ父の五郎市殿が使に來て今のか、さまのわたりがあんまりにむごいゆへわびことゑてくれて、如才のない云やふ十一や二で思ふ知にわ有まいし

瀧　コレ〳〵雀殿なにがにくふてなぞふしませふか

雀　サア〳〵そゑも有てやあんまりかわいのと胴欲がましつて儘子憎みになるもの

瀧　サイナアおまへ方のわいさつじやが儘子を憎むが天下のはつとかこなた衆の所へなでざんげをいふて行むすこゑおんなりかわゆふムらぬ

上　「ひとけりけられて道理々々

雀　百よ聞て見ればおかさまのが尤もそふな儘子にくむが世界の大法兎角息子が腹からぬがわやまりくぢわさばけさていいの

上　「しやべつしらぎがもへる火ゑたきつけらをて立歸るつらき親をば親にして猶もきげんを取るはゑがわいそにくんで五郎市わしとやかに立出

ト二人わはいる五郎市茶くんでる

五郎市　申か、さまおきが付やうと思ひ茶を入ました出ばゑ一つと

上　「差出ゑ早小雀がいひしを根にもち

瀧　何じや茶を入れたそりや誰〻頼んでそなたが飲だ飲わまり口ふさげよ持て來たか
五郎市　アノ勿体ないなんの飲あまりで厶升ふ初をくんで參ました
瀧　ム、初を飲まして此母を追出のかのめあらのまふぞれおこしや
上　「もぎとるひようしにおさけあや仕立し布子にざんぶりとかゝりゃつ流る親子と
て相見る茶とぞ成にける我あやまりも子にぬそる儘母性根とあらわまて
ト母親五郎市くんだ茶をわざとこぼし
瀧　ヤイ爰なそゝふ者めかわりのない晴着よふ此様よしたな
上　「と取て引寄せふぞもゝをゆびさきつよ〳〵二ッ三ッ四ッめの紋のつかみぞめのふ
悲しやと五郎市わ逃廻り手を合し
五　誤りましたあんぞからたしなみ升ふかゝさん
上　「ト詫びる目元もおろ〳〵涙だ
瀧　又なくかはゑるゥと
上　「聲はしたなき折からに人の女房のうわ水を呑にまゐるに小鮒の源五郎門口ゟ差
のぞき
ト小鮒源五郎盗人のおりにて内へは入る
源五郎　ハテこりや又親子喧嘩でごんそかしやうこりおいむゑ子殿
上　「笑止なわろと座をしめて
源　コレお瀧さんまゝ子のせわをやかゞ共わしがいふ様にならんせんかいの人にば

つかり思わせて
上　「きづよいお人とあてこそる
瀧　又小鮒殿のぢやら〳〵とそんなきげんじやないぞやあつたら口にお風〳〵
源五郎　サア其風にみがいつてそばへよるとうなるに付きげん直しにちよつと爰を
上　「手を取て無理に引こむふとも、ふつつり
源五郎　アゝイタゝこゝりやまゝ子殿のしやうばんした
上　「扨も手ひどひ御馳走と顔をしかめてさそりいる
瀧　ヲゝよい君の傍に告ての有るも構わゞこのくのいためなきる、なと
上　「じやうゞてかしおこりや成ると思ふて何がなつゝしやうにくむ儘子と取て引
たて
源五郎　つげてとゞわ此わろかめつりのなゐちよぼり殿
上　「むごいちそうにけとばせば五郎市むつと目に角立て甲斐もなき親の前せんかた
涙押かくし泣く〳〵奥に入にける
源五郎　サア見る人もなしきゝてもなし主の有るこなた様に言かけるから命ちづく首を
先ゑ投出そふか胴から下を受取氣かはづみ切た御返事を
上　「しなだれかゝるをそつとはづし
夫五右衛門幸ひ宿にいらるゝ其通り申きかせきつと御返事致させん
ト立上をばびつくり去て

源五郎　ア、コレ〳〵それいふてたまる物かよい〳〵そふ有からいこつちもいぢづくやぶれかぶれ御大切に思し召お連れ合のわくぢいふ所へいて申までじや

上　「いとま申とい、捨てゝけ出をお瀧わ引止めそりやこなたも同じなかまじやないか

瀧　サア其仲間がいふからは慥な證據首なげ出しても申わこれおれが心はぞつこん

源五郎　火にはなるもかまわぬたつた一度か二度の事うんといふ氣はないかいナア

瀧　そんなら一度でも大事ないか

源五郎　半分でも忝い幸ひ傍に人わなしおもてを差してつい爰で

瀧　トだきつくと突はなし

ヲ、けふとそれ〳〵親仁の足音アイ〳〵呼んそもふそこへそりやこそ爰へ出てくるもばんに〳〵

上　「音せばうろ〳〵うろたへるをむりよ押やり押出してばんにばんにと一寸のがれ二寸のびたるはなげの小鮒内義のごみによわされて跡をも見ぜして逃かへる五郎市様子を聞かながら聞ぬふりにて奥より出

ト源五郎お瀧さゝやきばんに〳〵とは入る

五郎市　申しかゝさまと、様のお目がさめ夕飯おあがろとおつしやるがわたしがそゑましよか

トコワ〳〵云ふ

瀧　ヲそりやわしがしましよ其かわりはぬい仕事取置て跡はいて日暮に成たら火をともし門どもしめ庭もはきつかい水から風呂の水いひ付ぜとくんでおきや子供遣もア、せわやれふ

ト五郎市そこらかた付あんどふに火をともし

上　「い、つ、奥へ入陰を跡打詠め〳〵恨み涙に暮けるが思ひ廻せは我身程親に縁なき者あらし

五郎市　ほんのかゝそま有時はと、様に氣がねそる今またと、さまほんのおらかゝさまがへだつてよき事してもけけつたりふんだり何事ぞ此家にうか〳〵暮そならまだ此上おどの様な恐ろしい目に合ふも知れぜ何國なり共逃げゆかん

上　「表をさしてかけ出せしが

五　ほんのかゝ様の所わ慮ろぜ

上　「どこをしやうに立戻り又かけ出してわ行先のあてのないのふ引されて行てわ戻り戻つてわちまたに迷ふおさな子の十方にくれて居たりける五右衛門わ寄合の時分ならんと立出て

トしやうじやたいより五右衛門たんせん打かけ出て五郎市を見て

五右衛門　五郎市よ何しているぞ

上　「そこにと、がめられ

五郎市　イヤどつこいもいきやしませぬおまへわどこへゆきやしやんを
五右衛門ヲ、おれわ寄合わ行ねばならぬひまわ入まいつい戻る
上　「いひ捨て行をたもとにもがり
　ト此間わないていふ
五郎市　モウ今夜わどこいもいかぢと内にいて下さをさなくばわしも連れていてくださ
　れ
上　「おろ〳〵涙の躰お見て思わぢ打しほれ
五右衛門なぜろふいふぞ仲間事いかぬと何かと跡のじやまちつとの間じやるぞしや
上　「そかせぞ猶もしく〳〵涙に聲もおどぶるい
五郎市　ど、さまわしわほんのか、様にあひたひいなぢて下されいにさいわひのふ
上　「泣きしほるれば五右衛門も胸わはりさく思にてしばぢ涙よくれけるが
五右衛門常から女房先がしかたいかに已れが子でなひとて朝から晩までせめつかひちつ
　との大ぎようにヌしてもぶちてうちやくむごひやつにくいやつもう引とらへい
　はうかと胸をさぞつているふがいないと思ふが爰をよう聞けと、わわるひ商賣
　をしている今やめたふ思ゑども仲間事故やめぞせぬそれとあのか、めがよふ知
　てまかぶら見ての我ま、氣ま、今追出しさらやら腹立どんな言をぬかろうやら
　ことにかれめが親わ惡物忽ちそちや已れが身よ難儀の懸るが悲しさに何事もか
　んにんぞる子心にも聞わけて了簡つけていてくれいほんの母にも他人がそい今
　さら戻ぞも戻されぢ其内に思あんしてういつらいめとさせまいぞ
上　「いひなだむきば五郎市わ涙を袖で押ぬぐい
五郎市　と、さまのくわなる事ならぶたれてもつめられてもかんにしていませう其かわ
　りよわぞこゑいこと早ふ戻て下されい
上　「早ふ戻つて下されとい、つ、尙もしやくり泣
五右衛門ヲ、聞わけがよいよ惣別かんにんといふ事が人わかんじん男とむまれかんにん
　のならぬは女房のまおとこ扱わ人中のつらはぢこぶし一つ當られてもそこわ男
　づく其外わ皆内證りんにんが則しんぼうちつとの間のるぞしんぼをして待てい
　やつい戻らう
上　「念頃ないけんながらのいひ聞せそれが小みゝにとまるともしらで五右衛門寄合
　のじかんなおそしと出て行せひも涙に門ぞをしめ内のともしび庭廻りいひ付ら
　れてあらましおかたづけまわる折からに
　ト此内五郎市おき〳〵跡を見送りろこら片付け
上　「お瀧の親のならぢ者三二五郎兵衛しらにせれゆび先うごくひげ親仁門の戸たゝ
　いて
五郎兵衛　お瀧〳〵
上　「ト呼聲は五郎市さてわ最前の小鮒が來たと心得てわざと其塲を知ぬふり聞ぬふ
　りして奥に入猶もせわしくたゝく

上　「トたゝくにぞお瀧も心ならねども

お瀧　誰ぢや〳〵

五郎兵衛おれじや爰明い

上　「おれじやわ親の聲又用無心か氣の毒と思へどせひ無く内へいれ

瀧　日も暮たにうと〳〵と何しにお出た

五郎兵衛何しにとわ娘の内へ親がくる事がはつとかおやがくる事わはつとかやい

上　「あためんどうなひざ打まくり

五郎兵衛お瀧たばこぼんもてこいやいきり〳〵もてうせいやい

ト五郎兵衛とろばうおやぢの形りしりまくり下にいて

五郎兵衛　扨いふまいと思へどいわぬ事は聞へぬじやきけお瀧此中かつた貳拾両夕部くみたでころりとしまい跡をつなぐ種かきれた五右衛門わ宿にかまわ十両か二十両かる氣できたと云てくれ見たかはやう出でア、胴も合わぬぞねのふ

瀧　アゝもふ其話し聞とむゝひかねの成る木も有る樣にまたしても〳〵無心主しの手まへも氣の毒殊に今夜わ留主まわいんで下さんせ

五郎兵衛イヤいぬまいわれこそふいへ五右衛門わ金のなる木が有げなまいばんまいばんむまい商賣もとでいらぎのつかみどりよふごろがこぬなわ今夜も働きの留主ならば戻るまで待ふむそめけん〳〵いふあやいなんよもよふしつているぞいよ

上　「そこ氣味悪るき一言にくわつと胸までせきのぼし

瀧　コレ親仁さん人の事でも大事と小事わじやらにもいわぬ物いふてよければおまへも京の島原でおきつちつ九次郎を殺ろしなんぎに及ぶを五右衛門殿の思案一つで事あふしまい親子ともよつゝがなうけふまでくらそがたれがかげ其恩をしつてならにがロいわんを等わあいかねかるたびにいたかわせそふ胴欲わわいわぬ物

五郎三　エゝやかましいわいやいべり〳〵とよふしやべるそんな事わ聞とふないハイそりや有てそぎた事今でも金をかせばよしいやといふと此村の庄屋へいて夜るの商賣いふてくるそれとも五右衛門がしんていしだい戻るまでべん〳〵とこふしてもいられまいねどころせい寢てまとふサアね所せい

瀧　サアそるわいなアそんならどうでもあふきかへ

五郎三　わわぎといつそ庄屋殿へいてか

瀧　サアそれは

五郎三　サアゝゝあんど爰や

瀧　はてねて待氣あら此一間ね所して上ましよう

上　「くらいをふせぐ明り障子引わくれば

五郎三　ヨゝよい合点我をも五つからおれが手しおいつ孝行な事もないさてちと腰もめ足さすれいやといふと庄屋殿

上　「おどし立られせひなくも
　　ハテおでさすりでもむ事なら致ませふ
瀧　「伴ふて入るもきづもの足の裏さゝ原ならぬやぶがきのへだつる思ひに五郎市わ
上　小鮒と心へ奥の間の親の差ぞゑぞこ爰と尋ねまわをどしれざれば勝手のとだな
　　を心ざしさがしあたりししゆらの一腰そつとぬけとりこわきよかいこみおのれ
　　最前々つた意趣と父の目ぬく不儀者め只置ふかと忍びより覗ひきけばお瀧が聲
　　ト五郎市一腰持奥を覗ふ
瀧　申おまへとわしとわ因果な縁切ふと云ても切られぬ今にも夫が戻られてわいぢ
　　づくでどふならふも知れぬ私かわいと思てならまあいんで下ださんせ
五郎三　イヤいなぬこゞといふと五右衛門をさかばりつけあかけさそる殺さふと生そう
　　とおれしだい
上　「廣言吐わ憎さもにくしいぬる所を殺そうかねてゐる所をつかふかとわきざしぬ
　　いて子心にとつゝをいつの一思案かく共しらぬ五右衛門わさゞ待かねんとつか
　　〳〵と歸る表の足音を人てそ來れと五郎市わ心せくま、障子こしぐつとついた
　　わお瀧が胴腹わつとたま切聲に驚きヤレ人殺しと三二五郎兵衛奥を差て逃入ば
　　五右衛門が戸けやぶつて見ゑば女房あけにそみ五郎市わ人違とうろ付を取て引
　　よせ
　　ト五右衛門表に閉戸をけやぶつては入る

五右衛門ヤイ悋恨み有わ斷りながら母と名がつきや親殺しわさまへしらぬかさわけ者め
上　「しかり付れば聲ふるひ
五郎市　かゝさまを小鮒めが女房にしをる故小鮒と殺ふと思ふたらかゝさまで御座んそ
　　こらへて下され怪我で有たと
上　「あゞなき詞も聞とが免
五右衛門何といふかゝと小鮒が不儀したとや其又相手わ
五郎市　奥へあげて行ました
上　「扨わと目かけかけ行を
瀧　のふ是待て下さんせ
　　ト お瀧くるしむ聲
上　「手負わよびとめ
瀧　其逃たれわ私が親三二郎兵衛殿わの子が其としらぬも尤けふひる小鮒かひたい
　　のれん不いやといゑば身を捨てそにんに出るとあほうの一てつもしやと思ひ宿
　　めて歸し今宵忍んで來る約束思もよらぬ親仁殿が見へまして又金の無心お歸ま
　　で待とて一間にわしと差向ひ小鮒と思ひ違へたわ有まい事でわなゝれ共親と名
　　の付ひたしを殺してわの子の身の科がなんと有ふとそれが悲しいやつぱり不義
　　で見付られ自害と沙汰して下されと
上　「思ひもぎもる心を疑ひ

五右衛門ヤア白々しい左程いたわる五郎市を是までむごく責遣ひ今更悲ひ不便あとつい
しよらしいおゝ〳〵
ト五右門おさなごを足にてけとばす
上「つゝゝりいひ出を詞の内くるしきからだを押直り
瀧これ五右門殿今去ぬる身がなんのついしやうこなたわ又五郎市に何しよせの何
あきない何そを腹で運て戻さ女房にさへいとまの狀まさかの時わ他人むきとつ
ねからのいひ聞せ男の子わ夫に付ぞふいひぬゝても
上「のがれぬぞや
瀧たとへ別義ないとても鬼でもならぬ恐ろしい商賣こなたわそれをゆきる氣かか
わいそうわうつくしゆ生れ付たあの顏を
上「しゆもくの上名よさらそうかと
瀧それが悲しさいとしさに
上「おひ出しそこねのむごくしん早ふ此家をにげよかし
瀧母御の方へいねかしとちやうちやくそるもこなたこそ一生其身で果る共せめて
あの子わ人にしたさと
上「わつと泣出そしんじつをきいて五郎市泣出し
五郎市か、さまこらへて下さりませぬんにもしらひで恨みまたひよんなことして切
ましあと

上「くやみなげけば五右衛門もしごくの涙にむせびなから
五右衛門一寸の虫にさへ五ぶのたましい有といへばまして我とても悴を連て歸りしを假
令しつけぬにつちもち人のかまををまわつてもふつゝりやめふと善心に
上「もとづく甲斐も情あや
五右衛門同類數多にからまさを
上「止ふと云ても止させをしちようにかゝる此からだ追付刀のさびくせと成身と責
つゝそなたとのふかわりて死だら果報じやわ科なきそちわ先へたち罪有我身わ
引のこりせめなやまされ死るで有ふたゝみの上でのりんぢゆうわ羨しいとかさ
くどき男泣にぞ泣居たる今はに成て五郎市を引よせて打ながめ
瀧いとしや是迄氣の苦勞怪我でないとて殺ををば無理とわ更に
上「思わぬぞや
瀧其かわりにわ佛だんに香華きらして下さるな四十九日わ家の内に迷ひ居との事
上なればじきよ手向を受升ふ名殘をしい我つま
「くるしいわいのといふ聲もむじやうのあらし一ふきに吹ちらされてわへなくも
此世の縁わきれにけりれふかゝさま〳〵とそがる我子のなげきをこたへ兼たる
五右衛門が身をふるわせて去やくりなき取みだしさる折からに
ト瀧くるしみながら死る三二五良兵衛奥方出て
上「一間の内方三二五郎兵衛始終を見屆け飛で出で

五郎兵衛ヤイ逃ぬ所がきめめ則親殺し此旨上ゑごんじやうせん

上　「いひ捨にげ出そをなむ三賓と飛かゝりなんの苦もなく引つかみうむを云せぢ氷のやいばぐつと突込む一ゑぐりゑぐる間に向へちやうちん人こそ來れと死がひを投捨我子を引立て

五右衛門是からが身の大事そちも親を殺それば我も身の命を取二人ともに親殺し此場に居られぢ旅用意せよ

上　「サアていと肩に引掛出る所に約束時分と小鮒の源五郎のそ〳〵と小ちやうちん内にはいり

源五郎　お瀧さん〳〵どうじやいなア

ト五右衛門源五郎の灯提打落そ

源五郎　おまへちやうちんけしてはづりしいかへお瀧さん

ト五右衛門源五郎を扳打ゑ切ゑをそ

上　「明りにそれと見るより五右衛門ていつ故と飛かゝりおどりあがつて真二つそぐに立のく八こゑの鳥たつか高野をあとにして飛が如くゑ出て行く

よろしく幕

伏見藤の森の場

一悖五郎市　一早野彌藤次
一岩木當馬の丞　一同兵部
一石川五右衛門　一家來大せい
一乘物三人
一捕手大せい

造りもの平舞臺向ふ黒まく上手に大鳥井都より伏見藤の森宮の体にて庭の神樂にて幕開く

ト參詣の仕出し三四人出て捨せりふにて這入ると鳴物止む

上　「身のとがを數へ行身のはかなくもしちやうにかゝる五右衛門が子ゑ引されておちこちゑ八目を忍むやぶれ笠子にも小笠を拾ひきせ三里夜の内明がたに伏見の里の藤の森かいどうそじに付にけるたくわへなければ五郎市にしたゝめさをる便りおくとほうにくれて居折ふゑ長袖武士とをもしき乘物は河たけからのあさ戻り何恐れなき物まうでと見こんで五右衛門近く立寄り

ト此上るりの内五右衛門旅形りやぶれ笠持五郎市同笠を持出で乘物を見て手をつかへ

五右衛門申そこつながらを乘物をお侍と見かけ旅づかれの涙人が御願の筋有て

上　「御聞届とよぎおく
家來　やい〳〵御乘物見苦い形で慮外なやつ下り居ふ
上　「下り居ふとさつとなり乘物の内より
兵部　家來待て
上　「い、かけられて乘物かたゑにおろす其内お五郎市にさ、したる脇差取て小腰を
　　かゞめ
五　某一人れ悴をつき長度の路銀遣きらし差當ての難儀何卒此一腰御求め下されな
　　ば御恩儀ならん
上　「差出そ乘物ひらき出づるを見れば七十こゑた白髮の老人優々と挾箱に腰打かゞ
兵　とれ御越の物これゑ
　　ト兵部上下大小おて乘物より出刀を取て
上　「手ゑ取てためつそがめつ
兵　ム、銜わかんとう身わせき打ち
上　「見れば見る程其昔我子に付て捨たる一腰ハツト驚き
兵　コレ〳〵理不尽これは他所より求められしか元の出所審かし
上　「と詞の内より
五　イヤ御念に及ばぬ則拙者母のゝたみ後の印と育ての親よりつたへ聞きし其一腰
上　「聞おり扨は我子かと乘付程お思ゑ共兼てよからぬ噂きく今のなりふり家來の
　　見る目傍恥ぢて心をしづめ
兵部　ハテノウ左樣かして天晴の御道具成共もつての性根が又物に移り有たら事わ落
　　にくいさびゞ出ましたなきつさきにこぼれきづきづ有性わなをりにくい一生か
　　亂れやきつばわ古いを元習慣されゞ友朋輩の付合が惡き地がねを顯そもめんを
　　れ
上　「目ぬきの龍わ後藤なれ共勢ひなきわ雲きりの間に住むべき所もなく
兵　逃さまよう有樣ぢまんのさめも出所わよけれ共親が放つて他人むき子わ子を思
　　へゞ傍わたりに目きゝが有ば物の生れといわれぬはてのふ有たらかくならで見
　　そぱらゑい此脇差
上　「老の見る目も情おしと物によそわし心と知ゑ
五　イヤ是迄いくたりか手おぼゑ悴が僅な小腕さへつき止たるわざ物拵よ構はゑ共
　　切味を見込わ御求めと
上　「いわせもあゑ
兵　サア〳〵其いくたりが手腕が尙氣遣ひ殊に御子息の小腕突止たとわハア心元な
　　し御存じない今日の物語り成共まゝ御聞下され某若き其折に月も忘れゑ正月庚
　　申の日御舘にわ庚申まち奥女中に戯れて一夜の契りに子種をおろゑ其折人の話
　　にわ庚申の夜くわいたいせし物わ必ゑ成人の後盜人そるとの事エ、死したりと
　　思ゑど是も跡のまつり仕宮の身に是非もなく其女お後の證據と一腰に金子をつ

々て古郷河内ゑ戻せしが其から後とば便りもなくア、モー今年わ何年になるかとわるい事わしはせまいか我爲のかたきおりと

上　「思ひ切て旦有ながら

兵　次第に寄る年來る日數人なつかしき折柄わ思ひ出して我と我心ゑ行衛を問ふばかり若其許のゆかりの内心あたりの人有ば傳へてくりやれ

上　「打つけに云聞かされて五右衛門わ其捨子こそ某しと云とせしがイヤ〳〵さとゑ心わき差してそれと知つても他人むき孫に我わ重罪人跡ゑとがめも如何ぞと心付きてよそ〳〵しく

五　ありし昔の物語我身の肌に存じらを思はゞ落涙いたしました定めて其後御子息の氣も改まり申さんが情なきわ是迄の罪咎つせゞ今にも細目の恥を受け親有ゑど、云われてわ不孝の上の不孝と思ひわざと見ぬふりきかぬふり余所にわしらい居られ升ふ

上　「と斷りいへば

兵　ヲ其心ならまだしもせめて其許の子息を我孫と思ひせんべついたさん

上　「せんべつせん金一包とり出ま

兵　こがねわくちてもくちせぬとまづ其如く惡事も又まつだいまでも其名わくちぬと心へ親の性根を見習ふゑ對面も是かぎり後世びだいわいづれ其をくべき者わ定まらゞ

上　「あく〳〵立て乘物へ涙かくしゑ入賜へばしばしと留るかひもなくはや乘物をゝき上て心もなげに急ぎ行

ト此内に脇差も金も五郎市に渡し還入る

上　「跡なつかしく五右衛門わ打しほれて涙ぐみ

五　現在親を親とせゞ子を子とさせぬわ我なそわざ此罰にてもごくぢゆうのざいくわのがれゞ

上　「淺ましやとせんびをくいてしやくりあきせんかたもなき折からに宏ごうじめへの時來り追手と思しき取手の役人

ト是ぜん〳〵に來り彌藤次家來をつれ出て來り

彌藤次　ソレ

取手　動くな

五　是は

彌藤次　いかに五右衛門是迄おしたる惡事のだん〳〵殘らゞ顯れ其上頭を手にかけし大罪最早のがれゞイヤ尋常に腕まわせ

上　「五右衛門ハットとゞめの事思ひ出して後悔はかゑわぬ所と心をそへ

五　成程仰せの如く身はもちろん女房も某しが殺したりさすれば悴か存した事ゑわゝらゞ彼が命をお助あらば尋常ゑ縄かゝらんがさもなくば死物ぐるい有無の返答承らん

彌藤次　ヤア云な五右衛門其悴五郎市事母をせつがい三二五郎兵衛といめをさゝぎる故
委敷白狀さそれば最早罪科は逃れぬ所
五　そりや御尤なる義なれ共其は後の母にして誠某が母ああらぬ何卒悴は御助け有
よふ此儀とひたすら御願申ぞ
彌藤次　コリヤ能承れ假令後の妻たりとも其方お連添居れば後の母を誠とゝるは則天下
の掟成わい
五　左よふても山升ふ何卒上の御慈悲を以て
彌　叶わぬ所じや
五　そこを何卒
彌　エヽ口說ごとを
上　「聞よりくわと目を見ひらき
五　ヤア聞わけなき御役人そをおいやるとかたつぱしより切て〳〵切ぬけるから在
捕ば取てみよ
上　「五郎市かこふてつゝ立たり
彌　ソレ家來ども
家來　うでまわせ
五　なあを
ト取手打てかゝる五右衛門五郎市を鳥居の内へ押やり色々立廻りある

上　「いうより飛付取手の人數ゑたり
五　おきこゑにてたづぬるもよう
ト〳〵立廻り有りて追ては入る五郎市うろ〳〵として出て來るをとりて
五郎市を捕へ肩へかけて走り花道へは入る跡へ捕手梯子など持出て來て
〳〵捨せりふ有身ごしらゑの内黑まく切おとし
造り物藤の森社の内西の方手水鉢五右衛門取手見ゑにて宜敷有り早太鼓是よりいろ〳〵は
しご立しばらく有り見事なる大立廻りしばらく追込て手水鉢の水のむ此内も立廻り有り
五　五郎市ヤアイ〳〵〳〵〳〵
ト又立廻つて一寸見ゑ此時兵部下手より出て來て
兵　ヤア暫らくおまち下さり升ふ
上　「聲をゝけて親の兵部は心もそゞろ取てかへして小頭に打向ひ
兵　ハアヽ科人石川五右衛門事ナ子細有て彼めには重々のいこん有り某に御渡し被
下ましよう
彌藤次　貴殿はどなた
兵　イヤ三位中將が家來岩木兵部
彌　ムヽ今御發向の諸太夫據なき御頼みなれど中〳〵老体の手に及ぶまじお怪我有
ては氣の毒に存ぜる
兵　仰せ御尤もなれど取損じ候はば老のしば腹致そまで武士は互ひのいこん晴し是

非御渡し被下升ふ
然らば御加勢御頼み申そ
ト彌藤次が鉢巻きたそき鉄とふ兵部へ渡そ兵部取て身仕度して五右衛門に向
ひ
兵　コリヤ〳〵五右衛門御前の意趣晴さん爲に岩木兵部が向ふたり切りぬけるあら
抜けて見よ老の手なみを見せてくれふぞ
上　「両は怒り内心は逃げよと知らそ目付顔付扨は我れを助けて其跡で腹召れん御心
か是非もなやと胸をそへ
五　コレ〳〵老人成程恨を晴させんが併しながら某が心入れあり貴殿養子當馬の烝
を呼びあやられよ一言申そ子細あり
上　「用ありげなる詞のはし
兵　ム、幸ひ某お向ひの爲にいなりまで參りつらん何卒是れを御呼下され
捕手　ハア、、
ト両人向へは入る
上　「まつま程なく當馬の烝息を切つて欠けきたる其と見るより五右衛門こへかけ
五　コレ〳〵五右衛門が運命今日にきわまるコリヤ當馬の烝實父がいこんを晴さん
とて向われたれそ捕損じたら切腹めされん事笑止さに手に立貴殿と呼につかわ
そ親にかわつて働られよ用捨はないぞ

當　ホ、其志ざし奇特なれそ今町人に成さる某し武士でなければ手柄は望まそ切ぬ
々なりとも勝手次第
五　ヤア其町人あは誰がしたぞ刀と折つた其恨今晴さいでいつはらそ一生氣樂あ町
人とは養父へ對して大不孝迚ても逃れぬ五右衛門が命他門へ對してこゝろがよ
いからうろたへ物め
上　「うろたへ物めと氣を付けられ
當　何さま最早のがれぬ處他門へ渡しては本意ならそ
ト居直り兵部より裘束皆々かり以前の如く身仕度して
當　如何に五右衛門盗賊それぞさそがわ筋目先知かへして養父の家相續させんとは
しらちやく〳〵去乍得心の縄かけては益なしまこと切ぬける所存ならば天晴手
柄に取て見せん
五　ヤア一たんは男づく此上何故用捨せんとりであまたの見る前へで
當　とるぞよ
五　とつて見よ
當　サア
五　サア
二人　サア〳〵〳〵
ト此立廻り始終迚がそふとする迚まいとそる刀をはなしまた刀をもたし五右

衛門覺悟してきつと成る又立廻り幾度もあつて此時向ふより

五郎市　と、さまか

ト走り來るを捕手追付取押て

捕手　五郎市取た

ト五右衛門是を見て刀を投捨て覺悟そる當馬の丞押つけて

當　五右衛門捕た

上　「是非なく繩をかけゐける

ト両人に繩かける

彌　ヤア〳〵盗賊の張本石川五右衛門親子の者獄家ゑ引け

捕手　ハア、、きり〳〵

皆々　あゆめ

上　「引立てさせ引も涙やしがらみのつながる縲の行あい兄弟ちすじの繩の跡につき

是非なく〳〵も

トよろしく三重あて幕

七條河原刑罪の場

一悴　五郎市　一早野彌藤次

一女房　おりつ　一岩木當馬の丞

一岩木兵部　一石川五右衛門

一引廻し人足

一棒つさ侍

一見物人

遣り物平舞臺向ふ黑まくまん中に大釜をそへあり上手ゑ床木二ツあり此ゑつに拔身のやり三本たて舞臺先ゑ一面のやらひ都て七條河原釜入の体ゑて風の音ゑて幕ひらく

ト淺黃幕貝物の仕出ゑ捨臺詞ゑては入るとしらせに付切つて落し是を床の上るりに成る

上　「しをきの場所ハ七條河原二町四方に垣もひめぐらしかたへにそへし大釜ハ地獄の責めを此世から

ト是あて淺黃幕を落去る

上　「身にあつまりし群集の中先と拂ふて早野彌藤次岩木當馬も相役のい、付られて是非なくも床几にかゝる跡からは親の兵部はこゝろもそゞろ叶わぬ作も立むかゐ

ト彌藤次當馬之丞役人の形にて出て跡より兵部付て出て下ゐ居りて

兵部　承れば五右衛門を此處にて御仕をきとや盗賊の刑罪は大てい打首當來稀なる御政法釜入とは存じよらざる御政法でム升るナ

彌　それは彼の科のなそ處先づ諸大名及び公家衆へ忍ひ入しは勿論去年島原にて平の平藏をころし金を取り三ゐは此程鼻を手にかけ一味のやからを白狀せゞ成だけむごき罪におこなひ同罪白狀せゞと用捨なき御上みの御上意役人の私しゐらゞ

兵　然らば悖五郎市は實の母が有ると申せば親ころし共申されまい是は何故の御同罪ぞや

彌　コハあらゐまりしお尋後の親を親とそるが天下の掟

兵　スリヤ是ものがれぞか

彌　いかな〳〵

兵　ハア〳〵是非もなき事共じやなア

上　「余所にはいへぞこゝろはやみ老の奥齒を噛ゞる鳴る音をかくす斗りなりかくと開より母のおりつ息を切てかけ來りしが夫と當馬がけふの役目思はく如何と垣の外うろ付内に引出そよその見る目もあわれなり

ト兵部しは〳〵と群集の中へは入るおりつぼうし抱へ帶にて出てあたり見廻し群集の中へは入ると先へ棒付ゞせいさつ紙のぼり持出る次に五郎市菱繩はだか馬にのり五右衛門も同じく馬ゑのり役人非人替々付そひ出て五右衛

門百日髭のび居る

上　「親にも子にも首かせの脊に網張のいしの紋しめつけられしうしろ手とゑびにかゝみてかぎに折血のかよひさへ夏草の燒き付らるゝ身の上と思ふ心のはかなくも打しほれてゞ座に出る

ト居床むしろの上にそもふ

彌　何んと五右衛門さま〳〵の責苦に落ざれば今日は重き罪悖五郎市を不便に思はば一味の盗賊殘らゞ白狀万民のくるしむる賊徒をかりとらそるがお上へ奉公此理をよく〳〵わきまへよと

上　「物やわらかに問かくる五右衛門ちつともわるびれず

五　ハアゝ御尤の仰殊ゐわれに御老体相役當馬殿の思召にも子は可愛わないか苦痛さそるをおもわぬかとお下げしみもム升ふが假令て申さば盗賊は國の鼠み取蟲そゐ盡されよやわづか手下の五十七十かり取られたとてさのみ天下の助にも成まい万民の爲あれば只用心ゐしくわなし取らるゝ油斷あればころ取る盗人も出來まそる五右衛門が最期の一句は

上　「のくばかり

五　石川や濱の眞砂はつきる共世の盗人の種は尽まじ〳〵

上　「重ねてお尋御無用に被成ませ何のにべおくいひなぐる氣の毒ゐまり當馬の燕

當馬　是サ五右衛門その身は格別悖がくつう又外々へとふ傳へたがかゐしみに成ふや

ら思ひきつて白狀してかるき罪にわわれよかし

上「妻や兵部のこゝろをばおもひやりつゝ、製それば

五ア、愚の仰や只今迄妻子一家にも語らぬ事をい、あわし大事を斗りし一味れ同類いづれをそれと名ざしが成ふかよし白狀したりとて悴の命助るにもあらぜ惡事をそれば惡事を立拔き釜に入ふが火に入ふがみんな同類さそなぜ、は思ひもよらぎヤイ五郎市よ苦痛と云も半時か一時しぬるわせつない物と心へと、が子じやうろたへなあつひと云もちつとの間こわい夢じやと思て居られよ

上「そかせばなんにもゑ、言ぜしく〳〵泣て居る体につよき心もよわりはて供に涙よしづみしが人目おもふて泣がほかくし

五コリヤそちや死ぬるがかなしいなエ、ひきやうな奴ッと、が子でないぞ

上「覺悟させんとはゑしむれば五郎市涙のこゑふるい

五郎市ひきよではあいこれと、さま道〳〵もいふ通りわしはま一ち度本のか、さまよあいたい逢わして下され拜み升るしんだらもふあとれぬそれがかなしうてなきまそる

上「しやくりあげたるわわをさに

五それは何をいふぞい母はそちが手わかゞたその科故に此お仕置あいたきやめいどでわ足してやろふ

五郎市イヤ〳〵それはのちのか、さまはじめの

上「初めの本のか、さまに逢して下され逢たいと泣をけしかねこらへかね

五コリヤあわしたうてもあわされぬお上のおきてと、にぢよさいがあるものかいヤイ

上「そがるにも涙見る涙早かなへにはけむらだち時刻うつるとせき立つる

ト五右衛門親子の繩目をとき非人が引立にかゝる

彌早く〳〵

上「こらへかねて母おりつかき押し破り走り入り

りつヤレ五郎市よ母じやわいのふ

上「かわいの者やとかけよるを

當コリヤおりつ〳〵誠の母にもせよ縁切つたれば赤の他人其利によつてお祟りなきをありがたし共思はぜか何面目に我子呼わり近くによるはかあわぬぞよ

上「さしとめられてこゑをかけ

りつのふ情おやはづかしや我子と云は盗人の妻と定まる此おりつそいりよしてたつた一ト言暇乞とさしてたべ恨めしい五右衛門ぞのこなたのこゝろ松つ斗り

上「五郎市を戻したに彼に惡事を見習し仕おきもあるに釜煎とわあんせりむごい胴欲なかふなる事としつたなら

りつ戻そまいもの情なやわしやくやしひくやしひ〳〵くやしいわいなア

上「身を投ふして泣居たるこゑ聞付て五郎市は釜の傍よりのび上り〳〵

のふか、さまよふ來て下さつた逢ひとふて逢いとふてないてばつかり居ま升たわいのうと、さまと一所あなあ爰で死にまそるしんだ跡でも人殺親殺しといわれてもあした業なら是非もあいが盜人の子といわるゝが私しやゝ悲しいかさま人がいふたならい、けしておまへの子ぞやといふて下され○申御けんぶつさまいづれもさま人殺しも怪我であつたと了簡して

上　「御回向頼み上升とわつと泣出そ心根をおもいやりつゝ人々もわわれと共に袖しぼる五右衛門ひたんの涙ながら群集に向ひこゑはげまし

五　此大勢のその中に賓を我に奪とられよい氣味共憎し共一の仇なきその人は不便とも思召れん去ながらめい〳〵我身を手本ぞと思ふて一言聞て下され○盜の元は陸より起り陸の初めは身持から若い御人はとり分々て色ぐるいあ手ばくちとつばめもあわぞ筆のさきのちには手さきを働らひてと親のもの他人のもの一人のかとふぞ二人りの味かた三人五人と枝葉がつき休めよふと云て休められぞ坂に車をころばそ如し車ははやく心はあと悔んでかへらぬ釜の罪我身ばかりゝ苦痛をさそるかなしさを推量あつて一ぺんの御回向頼み上升る赤練のさいごも子故のやみアタ面目ない面目ない

上　「面目なやとせきあぐる早てんどこの時來り釜に油のいきり立ちたぎりあがる

當　その音はなる神よりも恐ろしく

コリヤ五右衛門今端にのぞみ赤練の詞左樣心に思ふならなぜ同類を申さぬぞ

彌　其同類を白狀致さばお上の御慈悲之有よ今以て白狀致さぞ早く白狀いたそがよいぞよ

五　とてものがれぬ今日只今いづれも念佛頼みまそるぞ

上　「いひそて釜へ飛込たり

彌　白狀致せゆるめてくれん

上　「いふた斗に目もやらぞ性根亂るゝ五右衛門が子を思ふ氣のやるせなく片手につかんで五郎市を目よりも高くさし上たり

ト此上るりの内五右衛門五郎市を上げたり下げたり幾度もしてドいさし上る

此時釜の内よりせうちう火もへあがる五郎市泣叫ぶ

當　コリヤ五右衛門とてものがれぬ怜のいのちかまい立そる見苦しさ跡で苦痛をさせふよりなぜ一思ひに先立ん

彌　血迷ふたか

二人　コリヤ五右衛門

五　五郎市とゝが先がけせよ

上　「ぐつと突込む釜の底その身も共ゐ打重りくるい死せし石川が釜入のあと淵となる今は古跡の釜の淵深き罪障も消へけはてる報の程ぞ

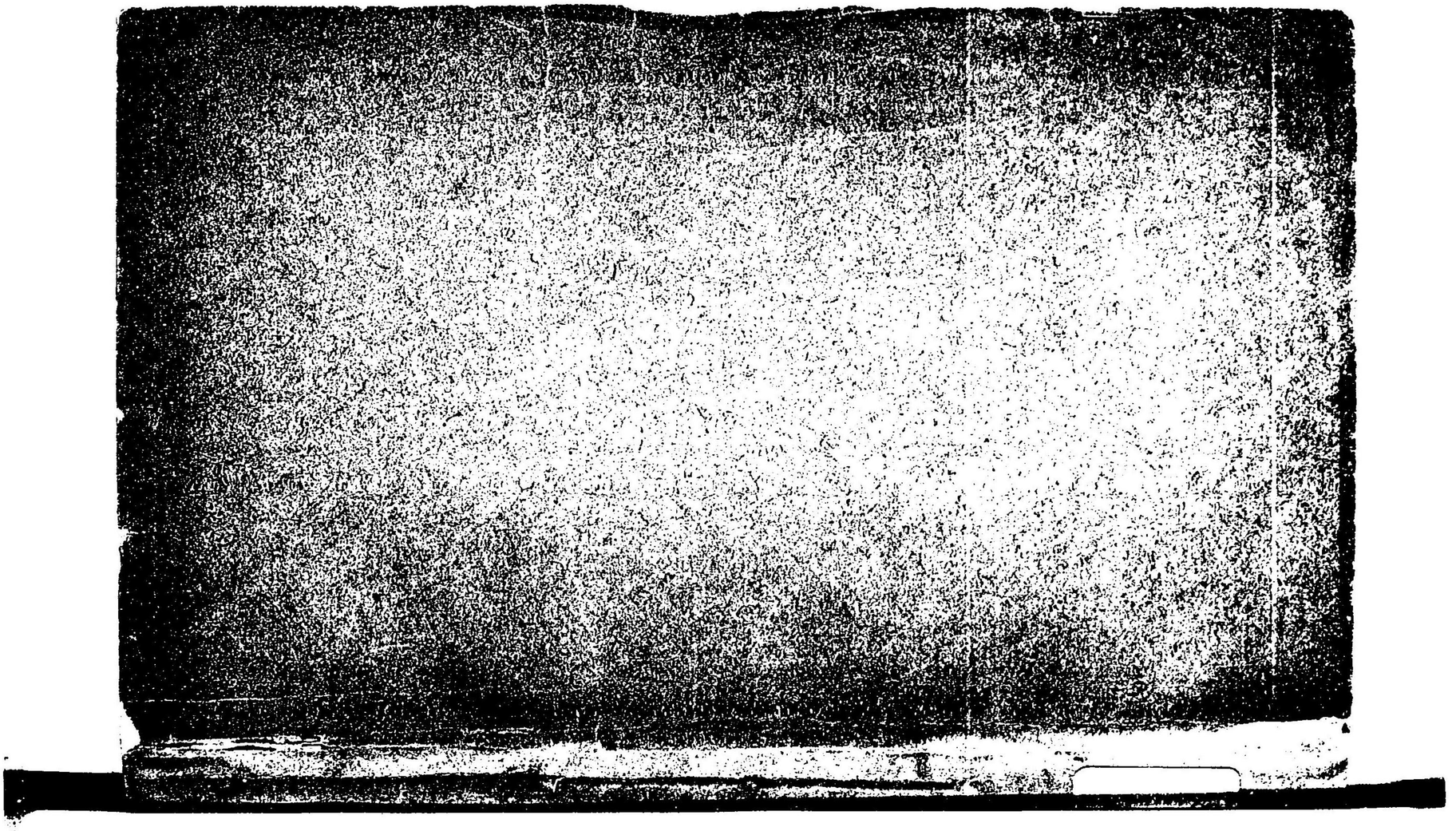
ト五右衛門五郎市を下にしきあかき首釜より出そ此をよろしく幕

明治二十八年三月八日印刷
同　二十八年三月十六日出版　（定價金拾五錢）

版權及興行權所有

著作兼發行者　大阪市東區備後町二丁目百二十一番屋敷　梅原忠藏

印刷者　大阪市西區靭下通一丁目四十八番屋敷　瀨戸清次郎



166
447

088546-000-6

特22-598

五三桐手染石川

梅原　香谷／著

M28
DBJ-0205

5